

大正七年度

時を超越して

創立記念日を祝する意義

今日わが女子大學創立の第十七回記念日であります。——學校が人々の精神を育てる母であるからには、この學校がまだ生れぬ前からの慈しみの親即ち此の學校創立について、又その後も尚深い關係を以て多大の助力を與へらるゝ母校評議員の方々はとりも直さずこの母校に生ひ育つた娘にとつては教へのお祖父様であります。——けふはそのお祖父様の大隈侯爵、森村男爵、澁澤男爵、久保田男爵が御臨席下さつて、こゝに教授、卒業生、在學生、大學部から幼稚園に至るまでの一大家族が集つて母校誕生日の内祝をすることは實に悦びに堪へないこととあります。このよき機會に於て母校の娘等が母校のお祖父様からいろ／＼この學校の生立ちについて、又この學校の爲に盡された方々で今日此處にお出でない方々の話、又その主義方針について、いろ／＼語り聽かされることは、諸子が母校の精神を知り且その母校の娘として、又日本の娘としての自覺を與へられるゝ刺戟ともなる最もよき機會であります。更に又獨り母校の過去のみに止らず今後の生立ちを如何にすべきか、更

に又母校の生立ちのみならず、わが帝國の多くの青年男女が學ぶすべての學校の今後の教育方針は如何なる道を選ぶべきかに就いても考へしめらるゝことでありませう。否、私達が母校の誕生日を祝ふに當つては、必ず以上の意味が含まれて居なければならぬのであります。この意味に於て母校の永い過去を回想する中にもいと畏き記憶は、母校創立以來屢々畏きあたりの深き御思召を忝らし、嘗て創立當初に於て、かしこくも 昭憲皇太后陛下の深き御思召をもて御獎學の御下賜金を賜はり、又明治三十九年の秋はわが文藝會の趣旨を聞き召されて内親王御四方を初め宮妃殿下の御臨場を仰ぎ、近く昨春四月五日にはかしこくもわが 國母陛下の行啓を仰ぎ、親しく尊き御教へを賜はりたる世に有難き光榮に浴したることとあります。かしこけれど 陛下には夙にわが國女子教育に大御心を傾けさせられて、曩に東宮妃殿下にて渡らせられた時、——明治四十五年の六月八日——一度此の學校に行啓あらせられまして親しく生徒の學習の有様を御台覽あらせられました。その折の御手植の松は年々に綠色濃く榮えて、かしこき御心をとこしなへに記念するものゝやうでございます。その松も六年の星霜を経て幹も延び、枝も張つた昨年の春、再び陛下の行啓にあひ奉つたのであります。この有難き御徳は御民われ等の上に最も尊き御教へを

垂れさせ給ふものであります。かゝる御徳を數へ奉ればたゞたゞ恐懼し奉るの外はないのであります。茲に又最近に御徳の表れたる一例を拜察し奉りますと、洩れ承るところによれば、宮中に於かせられては今年は例年春の御催しなる觀櫻の御會も御沙汰止みに遊ばされたるさへあるに、又近くは國母陛下には親しく聯隊に行啓を賜つてわが兵士の日常の生活について具さに御台覽あらせられたるやに拜承いたします。

この有難き御思召はその如何なる御徳のあらせられてにや。ひそかに恐察し奉るに、時局に對する覺悟について範を垂れさせ給ふ尊き御教へと恐懼の外はありません。われ等はこの陛下の御思召を體して、われ等國民たるものゝ時局に對する覺悟をなさねばなりません。又今日此の式を擧ぐるについてもこの心を以て行はねければなりません。

さて、私は再びこの學校の誕生日たるけふの記念式を擧ぐるに當つて何故にこの日を祝ふかについて私の考ふる所を申し上げます。で世間一般に行はれて居る誕生日の祝は私自身の感情に於てはあまり意味を爲さないやうに思ふので、私は未だ嘗て自分の誕生日などといふことを一度も祝つたこともなく又祝はれたこともないのであります。これは、私は成るべく時間といふものを超越して生活したいといふ考からであります。

年をとつたから偉いといふわけのものでもなく、又年をとつたから老衰するといふこともいへないと思ふのであります。成程世間一般の有様を考へると、一休和尚の申したやうに、正月は冥土に近づく一里塚であつて見れば、年を重ねるといふことは何にも嬉しいことではないのであります。私は斯ういふ意味の時といふものを超越しなければならぬと申すのであります。即ち我々は永久に生活する者、限りなき生命に生活するものであらなければなりません。

時は實現

時を超越するといふことは即ち生死の問題を超越することです。言葉を換へて言へば死といふ敵に勝利を得るといふことになるのであります。この意味に於ては、時は人間生活に何の關係もないかのやうであります。

然し又この時といふことを全く人間生活から離して考へるといふことは事實に於てはあり得ないことであります。即ち時は超越しても無視することは出来ない。昔からこの時といふことが人間生活の重要な問題となつて居るやうに、其所には必ず或意味が附帶して居るのであります。即ち時と人間生活とは常に相關連して其所に初めて或意義を持つのであります。この意

味から申ししますると時は單に人間の觀念から生ずる習慣的のものではなく、これは全く宇宙に於ける實現といふことが出来るのであります。もう少し解釋的にいへば宇宙の目的の實現であります。又自我の實現とも申されます。この言葉は哲學上用ふる言葉であつて、年若い人には解り兼ねるかも知れないと思ひます。私は今一つの例を申して今日私の考へんとする所を述べたいと思ひます。

過ぎし方を回想いたしますと、私一身の上にも嬉しい經驗も澤山にあります。同時に苦しい經驗も少くはありません。けれども過去の自分の生涯で何が一番嬉しかつた、又苦しかつたかと聞かれるならば、矢張りこの言葉——目的の實現された時、實現されない時——と申すの外はないのであります。子供の時は子供相應に何か目的がある——希望がある——理想がある——さうしてその理想は何時か實現するゝ時があるのであります。私は田舎の武士の家に生れましたが、その時一番嬉しかつたと記憶する事は父から一振の脇差——それはボクタウといつて鞘も身も一緒の木の刀である——を貰つて、それを差し又抜いて遊ぶこと、これ程嬉しいことはなかつた。それから嬉しかつたのは太鼓と鞭、それから木で拵へた玩具の鐵砲、それ等を貰つて、戦争ごとをして遊ぶことは當時の嬉しいことの最大

なものであつた。太鼓は今のラッパの代りに、鐵砲の彈丸の代りには石を投げ合つて隣村の子等と互に戦争ごとをしたものであります。それから尚嬉しかつた事は初めて身と鞘と別々になる刀を貰つた時、それから又少し年をとつてから今度は、眞に斬れる刀を渡された時、之は又非常に嬉しかつた。さうして彼の長州征伐の後であつたが、私はまだ十三歳の頃であつた。其の時私は志願兵となつて出たいといふことを懇願したのであつたが、父はまだ私を一人前の人間として扱つて呉れなかつたから、その希望は達せられなかつたけれど、つまりこの玩具の刀や鐵砲は理想であつて、本當の刀や銃を貰つたのは實現である。又玩具の刀や銃で戦争を爲して遊ぶのは理想であつて、やがて志願兵となつて戦に出るといふことは即ち實現であります。この玩具であり、遊びであり、想像であり、理想であつたことが、此所に眞の刀となり形となつて生れることが即ち實現であります。併しこの遊びは子供によつて違ひます。従つてその人々の實現する所も違つて來るのであります。

私が先年外國に行つた時、實に尊敬すべき一人の女の先生に會ひました。その人はどうして先生になつたのかと聞きましたのに、この人は子供の時人形を澤山拵へてそれに又椅子を與へ机を拵へてやつて、さうして自分はいつもその人形の先生とな

つて遊んで居たといふことであります。その人形の生徒が今日は生命のある生徒となり、その眞の教師となつて居るのであります。

私達人間のすることは皆子供から大人に至るまで、いろいろ將來の理想を描いて居る。さうしてそれを玩具として遊びとつゞだん／＼にその理想を實現して行つて居るのであります。それは國家のこと、世界のこと、一つとしてこの遊び、言ひ換ふればその理想の實現に外ならないのであります。人間はこの理想を描き、實現を目的として生きて居るのであります。この目的の達せられつゝ行くことを自我實現の過程といふのであります。

女子大學の發芽

さて私は又自分の過去の回想に戻りますが、私が刀や鐵砲を持つて遊ぶことをやめた頃、丁度十三歳の時でしたが、私は學問をする爲に郷里を出たのであります。其の時親は私を將來醫者にするつもりで私をさる病院に入れましたが、私が思ふには、醫者は人間の身體を療すものである。私はそれよりもつと人の心を療すことが出来るやうになりたい、さうしてこれを大きくして國家の病氣を療したい。といふやうなことを考へた

り或は又言つたりして、友達が多く自分は總理大臣になると言つて居るのを私は心の中でそれはつまらぬことであると考へて居りました。若し私が政治家になりたいといふ希望があるならば、私は山口縣であつて又自分の身寄りの者にもその方面に榮達の道を開く機會はあつたのであるが、幸か不幸か私の希望は其所になかつた。私は同じ政治をするにしても所謂國政を料理するのでなく、目に見えぬ世界の王國の政治をして見たいといふやうなことを考へて居つて、或時この事を私の叔父に話しますと、叔父はこの空想のやうな考を聞いて大いに叱りましたけれども、私はどうしてもこの考を自分の心から取り去ることが出来ない。いろいろ考へた末私は遂に教育といふことが私のこの希望を達する道であるといふことを見出したのであります。殊にそれは女子教育といふことに私の行くべき道を見出したのであります。さうして將來は日本にも是非女子大學が必要であるといふことを確信したのであります。この志を抱いて私は神戸に出て親戚の許に参りましたが、その親戚でもこの私の空想のやうな考を聞いて大いに叱り遂に私とは絶交するといふことになつてしまつたのであります。けれども私はどうしても私のこの考を他に轉ずることは出来なかつた。どうしても政治家とか又は軍人になつて見ようといふ心にはなれなかつた。で私が

又思ふのに、これはどうしても人の意志を當にしてはならない、自分の理想は自分一人の堅固な意志を以て實現して行くより他に方法はない、と考へてそれから私は、時の先輩たる人々を、一切自分から訪問することをさけたのであります。其の後私は獨りこの大目的を抱いて外國に遊學し、漸く其の計畫が立つて歸朝したのであります。其の時初めて時の總理大臣伊藤公を訪ねたりして私の目的を告げたのであります。この時も私の考へをあまり本氣に聞いてくれる人はなかつたのであります。伊藤公は冊分程私の考を聞いて進んで發起人たるを承諾せられ、西園寺、大隈兩侯に計ることをすゝめられた。兩氏も亦直ちに發起人たることを快諾し、而して大隈侯が濫澤男、森村男等に私を紹介して呉れられた。これより先き大阪に於ては故内海男、故土倉庄三郎氏、廣岡女史の熱心なる贊助があり、又教育界では久保田男の強き後援があつたので、茲に初めて私の理想が芽をふいたのであります。今日これだけの女子大學となつたといふことは誠に夢のやうにも思はれ實に隔世の感がある。が併しこれは私が子供の時から夢に見たり又遊び事にして居つたことが實現して來たのであります。——尤もこれにはいろいろ境遇の助けといふやうなことがあります。——兎に角この子供の頭にあつた理想が時の關係を経て遂に實現した

といふことになるのであります。この意味から申しますと、今日のこの女子大學は第十八年を迎ふる記念日とは申すものゝ、實は私自身の感想から申しますと、今日は第四十回の記念日であります。なぜ四十年であるかと申しますと、私がこの理想を描いて最初に建てた學校——大阪の梅花女學校では今春創立四十年式を擧げると申して來ましたが、この學校は則ち私の理想の最初の試みであつたので、言ひ換ふれば女子大學の理想の萌芽は既にこの時であつたと申すことが出来るのであります。

丁度この四十年間の理想を實現したといふ意味に於て同じやうな經驗感想を最近私は大倉孫兵衛氏によつて聞くことが出来ました。大倉さんは矢張りこの學校の爲に蔭ながら力を盡しました。大倉さんは矢張りこの學校の爲に蔭ながら力を盡しましたが、同時に又氏は實業界に身を置いて我が國實業の發展に、多大の理想を抱いて居らるゝ方であります。丁度四十年前前に於て、此所に居らるゝ森村さんなどと一緒に、我が國海外貿易事業の發展といふことに理想を置いて、即ち茲に森村組を組織して大倉氏は陶器製造を擔當されたのであります。爾後四十年、その間には言葉に盡せない苦心もあつたのでありませう。或時は自ら技師ともなり、小僧ともなつてその陶器製作を研究し、今迄に於てはどうしても日本に於て出來なかつた品を作り出す

ことに苦心した。この四十年の努力を積んだ今日は立派に舶來品と同じやうなものが出来るやうになつた。この志望を遂げた感謝の記念品だといつて、その研究になつた陶器を一揃へ私にも贈つて下さつたのでありますが、私も實にこの大倉さんの感謝の意に同感を禁じ得ない所があるのであります。私の四十年の努力の記念品は何であるかと申すならば、それは我が校風に育つた人格のそれでありませぬ。私は我が校の此の頃、又この校風の結果たる今日の卒業生及び學生が年を逐うていくらか宛でも婦人の人格を高めつゝあるのを見ると實に感謝に堪へないのであります。これは實に私の自我實現であると同時に又あなた方御婦人の自我實現であります。

が併し、私はまだ實は斯く／＼の人格が完成しましたといつて其所に一つの記念品を出すにはまだ前途遠遠であると申さねばなりません。私は今あなた方又私の自我實現であると申しましたが、その自我實現といふことは、實は斯くして自我實現をするといふことを確めただけで、眞の自我實現はこれから先きのことに屬します。學校から申しても今は大學部の卒業生が千七百卅三名、高等女學校卒業生が千四百四名であり、現在校生が千六百名である。成程創立當初に比べると満足しなければなりません。この大勢の人を作つてももう一つ其所に、此の

團體が將來益々各自に自我實現をして行く所の原動力を蓄へ得たかどうか、丁度機械は出來たが發動機は裝置されたかどうかといふ意味に於て私は今日の團體人格にもう一つ永久生きる所の生命信念の發動を要求しないでは居られないのであります。

我が國帝國の今日の急務は、この限りなき生命の發動といふことにある。而もこの力は我が國の婦人から生れ出るといふことは四十年前に私が日本に女子大學創設を夢みたことよりも、もつと空想として取扱はれるかもしれない。けれども私は必ずそれは實現しなければならぬ事と信じて居る。

この實現の力は時である。今日我々が記念式を擧げてこの實現の過程を祝ひ、又將來の希望を確立して其所に向つて新しい今後の原動力を發展して行くといふこと、其所に記念式の意味がなければならぬと思ひます。さうして遂に私達の將來に於て自我實現の記念とすべき大人格の標本（團體としての）を見る時が必ず來ることを私は信ずるのであります。

〔家庭週報〕第四百六十四號、第四百六十五號、大正七年四月

斷食の日

合衆國民の健氣なる祈り

米合衆國大統領ウヰルソン氏は去五月卅日の同刻を期し、この日を合衆國民が擧つて正義の戰の爲に天に祈る日と定めたのでございます、勿論これは大統領が國民に命令したわけではなく、人類共同の事業として正義心の團結を促したのであります、この大統領の希望に對する合衆國々民の意氣は又更に進んで、當にこの日を「祈りの日」としたのみに止めず、遂に國民擧つて「斷食の日」と定めて、これを實行したとのことであります。

×

大正7年度

現時、歐洲の戰爭は敵味方とも幾多の犠牲を拂ひつゝ各自の目的に向つてその戦ひをつゞけて居ります。さうして又敵味方ともこのたゞかひの結末はどうなるものであるかを豫知する者はたゞ神あるのみ、到底人力の及ぶものではないことを認めるほど、彼れも我れも天に祈りつゝ戦へる状態にあるのであります。されば、何れの國に於ても今日は當に軍用品を軍隊に供給

する爲に忙殺されるといふよりも、靈の糧即ち宗教の精神を傳播する爲に各自の國々はあらゆる方法を用ひて居る有様であります。

併しながら、その祈りはさまざまであります。獨逸は、彼れが常に揚言する如く、彼れ自國民は神の選民であるとし獨逸の文明を世界の文明とせんが爲に、即ち獨逸といふ我の力の下に世界を統一せんが爲に、彼れは士卒の士氣を鼓舞し國民の意氣を振作せんが爲に神の力を信ぜよといふのであります。これに較べて今米合衆國民が彼の斷食の日に如何なる祈りを捧げたるかを見るに、彼れは正義の勝利の爲に、眞に天の善意志をして成就せしめんが爲に、あらゆる犠牲を拂ひ、あらゆる苦闘に堪へつゝあるといふことを知ることが出来るのであります。

彼れは國民に訴へて、

「我が國民たるものは宗教宗派の區別なく、神に對つて、自由の爲に闘ふは

我が軍隊に勝利を、

軍議に與る議員、參謀官に知慧を、

我が國民に正義と信義の擁護の爲に犠牲となるの覺悟を與へ給はんことを」

祈ることを希望する。といつて居るのであります。

一億の國民が國家の目的の爲に人道の爲に、正義の爲に、宇宙の善意志の爲に斷食をして祈るといふことは即ち米合衆國民は正義に共鳴が出来る國民であることを證するものであつて、この心こそ、人類が共同事業を營んで天の善意志を實現して行くものであることを語つて居るのであります。

この心は強制的ではなく、自發的でなければなりません。大統領が祈りの日を提議すれば、國民は更に深くこれを實生活の上に具體化して斷食の日とし、血を以て、生命を捧げて正義の爲に祈るのであります。以前から米合衆國では戦争以來、週に一度宛の肉無し日豚無し日といふ日が定められてあります。これとても單に命令としてゝあつたならば個人の都合上乃至商賣上からいへば非常な不都合と不利益とを感ずるものであります。せうけれども、彼の國民の今日の覺悟のいたす處は如何なる家庭でも如何なる宿屋かやでもこの日を嚴守して居るといふことであります。これみな他から言はれるからするといふのではなく、自發的であるから出来るのであります。「これが今日我々の行ふべきことである」といふことを自ら考へ自ら判斷して初めて一國擧つてこれを行ふことが出来るのであります。

米合衆國民のこの氣性——自ら判斷し自ら嚴守する——といふことは獨り丁年に達した男女國民ばかりではないのであります。未丁年者兒童に至るまでこの精神を以て貫いて居る、即ち兒童も亦國家の要求を感知し世界の機微が洞察出来るといふことが出来るのであります。今日の合衆國民とその兒童に至るまで及び其他の國々の男女國民及兒童が自省、自覺、自發して居る有様を對比して見る我が國の狀態のそれは、果して之でよいものでありませうか、又日本の教育はこれで眞に緊張して居るものであるといはれませうか、私達は省みてこのことを申さずには居られないのであります。わが國民として、更に又わが住み家なる世界の一員としての私達の務は今日のこの狀態で満足出来るものであるか否かを省みることを一日も忘れてはならぬこと、思ふのであります。

〔「家庭週報」第四百七十一號〕大正七年六月

病弊いづこに

現今教育界に於いて、あらゆる方面に種々改革を必要とする

が、その中心點は二つに分ち得ると思ふ、即ち一は制度乃至形式の改善にして、他は内容の改善である。然しながらこの二つは決して別々の問題ではなくて、一の問題の兩方面たるのである。内容を改むるには同時にそれに伴つて外容をも改めなければ、到底根本的の改善は出来ないのであるが、しかし外容は整つても、それが爲めに内容が直ちに改善せらるるといふ譯ではない。それ故にこの兩方面を同等に見て改善すべきであつて、而して教育界一般の改革問題がこゝに歸着すると思ふ。

從來我國の教育界は餘りに制度改善に重きをおき過ぎはせなかつたらうか、どうも教育の形式改善の方面の努力に偏り過ぎてると思ふのである。教育の振はない所以、乃至弊害の根本は、形式方面よりも寧ろ教育機關運行の原動力であつて例へばこれを動かす發動機ともいふべきものが不充分で、原動力の乏しきにあると思はれる、今日の教員が物質主義に傾いて、その天職として献身的に生涯を教育に献ぐる如き堅實確乎たる人に乏しく、俸給の多寡によつて職を替へるといふやうなのは、無論一方には待遇の悪しき爲めに據所なく此の如き弊に陥るといふ點は、充分同情を以て認めてやらなければならぬのであるが、然し教育家が物質的に困難する位のことには、いかなる時代にも見る事であるから、も少し彼等に熱誠あり、又職に奉ずる

心が強かつたならば斯かる弊は大に救はれたであらう。

教育家の人格が出来ないといふのも、又教育の力の薄弱なるといふのも、畢竟はその原動力の乏しいのに歸着するのである。それ故に今日の教育界の病弊を根治せんとするには此の根元に改善を施すといふことより外に適切な途はないであらう。

然らば原動力とは何をいふかと云へば、それは人間の自發力たり自動力たる精神の力、意志の力をいふのである、この原動力を自由に働かせ自由に發展せしめ得るやうな制度を布き境遇を與へるのが最も必要な事である、然るに今日までの我國の制度は寧ろこの自然の發動力を壓迫し妨害するやうになつて居る。それ故にかゝる制度は是非とも改めなければならぬ。而してそれに有効な制度としては今日社會の問題となれる選擇制度に如くものはない。

選擇制度に二種ある。一は獨逸の大學に於いて採れるやうなもので、大學程度になると全然生徒の自動に放任する、他の一は部門制度を置いて學科及び教授上の整理に必要な規定と、學生の人格發達と才能の開展との爲めに必要な標準を定め秩序を設けて、その範圍内で各自に選修せしむるのである。而して我國今日の狀態からいへば、獨逸に於いてさへ種々の弊害ある前者の極端なる放任主義を直ちに用ふるは考へもので、種々

の弊害や危険があらう。それ故今日の所では部門制度に於ける選擇制度を採つて、一齊教授法や學年制を廢すといふやうな改善を加へたならば、初めて眞に人間の原動力を其處に發揮し、各自が天賦の能力を自由に發展し得るやうにならうと思ふ。

次に我國の今日の制度では、餘りに澤山な學科目を教へ、又澤山の教授時間を設けて教へる事を主として居る。それが爲めに消化し切れない程の、又消化出来ないやうな學科を教授して居るが、これを改めて成るべく科目を減じ、教師の教ふる時間を減じ、その代りに生徒自身に考へ研究する時間を増加して、そして雜駁な知識の分量を澤山とるといふやうな傾向を一變せしめ、知識の徹底に重を置く様に改むるのが急務であらう。これは余の年來の主張であるが、從來はかゝる改善が實行さるゝは殆んど不可能絶望の状態であつたが、今日は帝大の方でも内部よりかゝる改革を叫ぶに至り、世間も亦これを認むるやうになつた。加之單に大學のみならず高等學校も中學も乃至小學に至るまでこれを及ぼさなければならぬといふ様に輿論が變つて來て、改善の功を奏する望みは益々多くなつて來た。これが實行され、ば今日教育界の種々の弊弊は根治され得るだらうと思ふ。

尙ほ一つ改善すべき點がある、それは思想信念の根柢の薄弱

といふことである、教育家及び學生の態度は確乎たるその宇宙觀を根柢として出發しなければならぬ、それが爲めには天を相手にして事をなすといふ如き信念涵養を専ら努むるが肝要である。然るに今日までは、徒らにその形式のみをとつて實體に觸れることを缺いたが爲に、眞の成績を擧ぐることが出來ないのである。故にこの點に於いても亦大いに改善して人間の人間たる所以を發揮し得るやうにせなくてはならない。而して教育界改善の根柢がこゝにある事も次第に輿論が認めて來て、今度の改革案にも信念を涵養すべしといひ、或は教育を力あらしむる爲めには宗教が大切であるから、各大學に宗教科を置くがよいなどといふ意見も生じて來て、今日に於てはかゝる根本的改革も望まないではないといふ傾向になつて來た。

之れを要するに制度の改善は勿論必要に相違ない、何故となればこれが爲めに自動自發の源泉を妨ぐることが多いからであるが、更に積極的には、教育機關を動かす原動力を養ひ培ひ、その發動機ともいふべきものの完備に努力しなければ眞の改善は行はれないと思ふ。

〔内外教育評論〕第十二卷第六號〕大正七年六月

今秋の諸問題

昨年第二學期の始業式は我々はずるふん心配を以てこの式を擧げたのであつた。その後、時局は益々險惡となり、戰爭は何時終熄するものともわからないやうになつたのであります。

それに比べると今年の秋は漸くわが帝國の態度も、外は世界に對し、内はわが國民に對して稍明瞭なるものとなり、人心も亦緊張するに至つたのは誠に喜ぶべきことと申さねばなりません。この喜ぶといふ意味は、單り我々の希望した時期が到來したからといふ意味ではなく、寧ろ内外の時局はより以上に切迫し、人心は益々動搖して如何にも暗黒の度が加はつて雲行はいよ／＼心配なやうに見えるのであります。併しこの暗いやうに見えるのは追々と曙光が近づいて來たしるし即ち夜明け前の兆候である和我々は感ずるのであります。私は此の意味に於てこの秋は一層希望に充ち、又心の底に歡びの念を禁ずることが出來ないのであります。

昨年は我々も帝國の國民として先づ時局に對する態度を作り、氣分を緊張する必要を感じました。さうしてこの秋に入つ

て其の意志を一層鮮明にし旗色を明らかにして私共の進むべき道を定めたのであります。その先見は決して誤つては居なかつたことを自覺します。今秋はいよ／＼これが事實となつて即ちこれを實行に表し活動に進展せねばならぬ時となつたのであります。

そこで、私は今日の時局の向ふ所及び四圍の事情の狀況について見る所、感ずる所の概要を述べていよ／＼この秋の活動に入らんとする人々の爲に参考に供し、もう一層その力が有効に使はれ、もう一層その經驗の豊富なることを希望するのであります。私は今それを、私共よりも一層進んだ經驗を持つて居る人々の實例について考へて見たいと思ひます。

私の舊友である亞米利加人で、ダクター・スカツダといふ人から最近に受取つた手紙があります。博士夫妻は最近迄日本に居られたのでありますが、その手紙は思ひがけなくも西伯利亞から來て居るのであります。丁度、私が昨年病氣の爲赤十字病院に入院して居つた頃博士夫妻は度々見舞つてくれましたのであります。私は退院後一度は御禮に行つたのであります。其の後又直ちに轉地療養に出たものでありますから、ついその儘に互に往訪の機會もなく、其の上どうしたものか其の後一向に消息さへも絶えて居ると思つて居る所へ久々でこの手紙を受

取つたのであります。この通信に依ると、博士は、時局の切迫を、自身は亞米利加合衆國の一員として傍觀するに堪へず、遂にチャブレン（戰時布教師）として従軍することを志願した。とあります。所がチャブレンには年齢に制限があつて、四十歳を越したものは出ることが出来ない規定になつて居ります。今年既に六十一歳の博士はその志願が無効であると知つて、今度は醫師として赤十字社の方へ奉仕することを希望した所が、それは初めて希望が達して今西伯利亞の赤十字社の方に来て居るとの事でありました。博士の夫人は以前から布哇のクワイハオセミニナリーを經營し、其所の校長をして居られたのであります。が、今度日本への來遊を終つて博士が此の思ひ立によつて西伯利亞へ出征されると同時に、夫人は幼い子女を具して再び布哇に赴き、その使命に就かるゝとの事でありました。

私はこの手紙に接して大いに考へさせられたのであります。此所に若し、國民の義務とか、責任とかいふことをたゞ表面的のみ考へて居るものがあつて、その人をしていはしめたならば、博士夫妻の如きはその年齢の上からも、又その職務の上からも何も戦地に行く義務はないのであります。

けれども、博士は、自分は合衆國民の一員として、國の使命を世界に盡す一員として、時局の進展を傍觀して居ることが出

来ないといつて居らるる。戦争には若い者が行つてよいのである。けれども、若し眞に國家の將來を思ひ國民の責任を考へたなら、男子でも、女子でも、老人でも、子供でも、自分の國は自分等が保護しなければならぬ。自分の國の理想は自分等國民の一人々々が實現しなければならぬのである。國の使命を世界に盡すのは自分等一人々々の肩に割當てられて居る責任であるといふ自覺、この自覺に醒めた時、子供があるとか、妻がある、家がある、老人である、といふやうなことは少しも考へない唯奉公一心であります。

亞米利加の人々が老人に至る迄、殊に國外に在る人々が祖國に對してこの意氣を持つて居るのを見て私は感動せざるを得ないのであります。どうしても、國家の爲に献身する、さうせねば自分の心がすまないといふその國民的態度はただにスカツダ博士一人に止まらない。全國民の意氣込みがさうであるのであります。

殊に貴族富豪にこの態度は著しく表れて彼等は自ら進んで國家の爲に献金する。又自ら志願して出征する。その健氣な態度を日本の現狀と比較して如何なる感が起るであらうか。日本では近頃米騒動など、いふことが起つて、貴族富豪は暗にその態度を攻撃され反省せしめられて居る。

又感心するのは米國の學生であります。今度の戰爭に米國が加はつてからその第一に出征したのは學生であります。又その第一に名譽の戰死を遂げたのも學生であります。その氣風を喚起し士氣を鼓舞したのも亦學生及びその教授でありました。

又一方婦人の目醒しいことは既に多くの實例が擧げられて居るのであります。殊に最近亞米利加の婦人團體は、自ら左の提議を提出して居ります。それは丁度男子が兵役に服従するやうに、婦人は尠くとも一ヶ年間家政學を學ぶ義務に服すること、といふのであります。さうして彼女等は、國家の爲に婦人の天職に奉仕すべく、又一朝事ある時は男子に代つてその義務を擔當するといふ提議を婦人自らが出したのであります。今度の戰爭に依つて目醒めた彼等のその活動の動機が如何に根本的に準備されつゝあるものか、この一例を見ても推察することが出来るのであります。

讀つて之を我が國の狀態に比べるとどうであらうか。日本の成金者流の態度はどうか、貴族はどうか、學生はどうか、婦人はどうか、一々その對照を求めて見ると誠に思ひ半ばに過ぎるものがあるのではあるまいか。

X

ある統計によると、我が國の病者といふものゝ内一番多數を數へるのは恐るべき悪い病氣に罹つて居るものであります。殊にそれが將來國民の教育を以て任ずる師範學生に一番多いといふ事實が關西地方に發生した事、今又東北地方の青年に非常な勢で蔓延して居るといふことは實に戰慄の至りであります。

又我が國の婦人が時局の影響を受けて從來の記録を破つたものは何であるか、富山の女房一揆である。どこに至誠の活動があるか、どこに眞の救濟的行動をしたものがあるか、どこに果して婦人の手によつて、例へば一つの食物研究でも實行されつゝあるものがあるであらうか。誠に腹藏なき觀察は寒心すべきことのみである。これで我が國の態度は善いのであらうか、諸子は地方にいつてどういふ調査をされたか、どういふ感じを抱かれたか、その感想を聞きたいと思ふのであります。

日本のこの狀態について某博士は、これは日本の教育の弊であるといはれて居る。即ち教育の力のないことである。私も日本の教育の實際について調査した結果矢張りそれと同感であるといふの已むなき事實を見出すのであります。

私は、我が國の道徳が殆んど骸骨同然、血もなく、肉もないものであるといふことを痛切に感ずるのであります。それと同時に又わが國の女子教育の不徹底なことである。我が國の女子

教育といふものは必ず先づ良妻賢母といふことを稱へる、けれどもそれは少しも徹底して居ないのであります。なぜならば婦人は其の主義に教育されてその言葉は知つて居るけれどもその行を知らない。これでどうして其の實が擧げられやうか。一方教育の立場からいふと、斯ういふやうな教育で我が帝國の使命を果して全うすることが出来ると思はれやうか、又この教育で眞の日本の娘を育て上げることが出来ると思はれやうか。

私共は唯批評して居るではありません。唯他人の事をいうて居るのではないのであります。又どこからかさういふやうな運動が起るであらうと人に期待して居るのでもありません。斯う感じたならば自分が改める、自分が行ふ、自分が今日から始める覺悟であるのであります。これより外に今の自分を救ひ、人を救ひ、國を進める道はないのであります。

それで、今我々の目前に迫つて居る問題は即ちこの我が帝國の女子教育を如何に改善すべきかといふ問題であります。私は出来るだけ今年の夏をこのことの調べに費したのであります。これは獨りわが女子大學の方針如何といふだけではなく、わが帝國の女子教育を如何にするかといふことは、これは自分の盡さなければならぬ義務と信じて居ります。私はその爲に微力を盡すといふ覺悟を持つて居ります。併し、これは自分の一人の

力ではない、全體の努力である。全體の戦争であります。殊に婦人その人々の實行に俟たなければならぬことはいふまでもありません。

この問題の要點を擧げていへばつまり我が國女子教育を徹底せしめること、もう一つは我が國女子教育の程度を高めるといふこと、この二つであります。

今わが國に於ける女子の高等教育と稱して居るものゝ多くは、これを亞米利加に於けるものに比べると恰もコレージ程度のものゝみであります。然るに、女子教育を徹底せしむるには、いひ換ふれば今日の日本の女子教育がもう一步日常生活にならなければならぬといふことの爲には、どうしてもこれを大學程度にまで進めなければなりません。さうして女子の天賦性能に鑑み、又我が國現時の國情に照らして今我が國の女子大學として設置されなければならぬものは家政學科（理科）宗教科（文科）及び醫科の如き各單科大學及びこれ等を中心として他の學科を聯絡配處したる女子綜合大學とするものであります。

今日、この時局に遭遇して、先づ我が國の高等なる教育を修めて居る婦人は國民として如何なる義務を果たさなければならぬかを考へて見たいと思ひます。今秋の教育臨時議會は數日ならずしてこの問題を討議しようとして居ります。又文部省に於

ては、教育博物館に家事研究製作品の展覽會を催して婦人の發奮を促して居る。今婦人の研究問題として目前に迫つて居るものに食糧問題がある、衣服問題がある、住居の問題がある、育児問題がある、家庭衛生社會問題がある、禁酒問題がある、風紀問題がある。それ等のすべては婦人の努力と研究を俟つて居るのであります。

私はどうしてもこの秋に於て今日の趨勢が婦人の爲すべき責任と自覺を促して居るやうに思はれる。さうして婦人が其の義務を果し天職を全うせんとして居るに對して、先づこの女子の教育をして我々の理想目的を遂行し、此の際益々進歩向上して國家の良民となるべき權利と義務を有することを自覺しなければならぬと思ふのであります。

〔家庭週報〕第四百八十五號、第四百八十六號・第二學期
始業式に）大正七年

時局問題に對するわが婦人の態度如何

女子の國民的自覺

我が日本女子大學校が創設以來最も力を注いだのは其の主義に標榜したやうに、わが國の婦人をして、人としての自覺、國

民としての自覺、婦人としての自覺を促したのであります。爾來時の推移に従つて種々の時變に遭遇いたしました。其の最も我が國女性の頭上に刺戟を與へたものは蓋し日清戰爭日露戰爭及び今回の世界の大戦亂であります。此の戰爭がだん／＼と我が國民をして世界といふ大きい舞臺に乗り出して來るに従つて我が國婦人も其の影響を受けざるを得なかつたのであります。さうして國民としての自覺即ち婦人も亦國民である自覺を促され又それが擴大しては國際的の意識といふものが多少ながら訓練されて來たのであります。尤もそれは果して如何なる程度に迄生活の事實となつて居るかは疑問とせねばなりません。が、併し、少くとも現代日本の女子最高教育を受けたところの卒業生、又受けつゝあるところの學生の間には幾分この意味の自覺が其の實際の生活となつて表れて居るといふことは決して過言ではなからうと思ひます。否、今日は我が國婦人の間にはこの國民としての自覺が一層鮮明になつて、婦人の間にもやがて國民としての活動が開始されやうといふ時機に遭遇して居るのであります。其の婦人の各自の緊張した生活は、婦人の力を以てしても何ものかを致し、何事かを爲さうといふ用意を整へて居るといふ状態であらうかといふことが察せられるのであります。が此の時最も深く此の叫びに共鳴し、最も鮮明な自覺を

以てこれを指導して行かなければならぬのは即ち今日の高等教育を受けたところの婦人及び其の教育を目的として居るところの學校の責任にあると思ひます。此の意味からしても今日一層女子に國民教育の徹底を期しつゝあること、又さうあらねばならぬものではないかといふことが考へられるのであります。

私は先づ今日の我が國婦人の實際生活殊に此の時局に對する婦人の態度、及び其の感想が如何なる程度に喚起されつゝあるか婦人自身の表明を聞きたいと思ひます。

歐米の婦人は斯かる場合につれて、其の態度、其の自覺、其の興味は非常なものであります。私は丁度此の日本の今の婦人が今の日本の状態をどう觀察して居られるか、その空氣に對してどういふ感じを抱いて居られるか、又その國家の叫びにどう共鳴して居られるか、又最近の婦人の頭に何を考へられつゝあるか、さうして其の生活は如何なる目的に向つて進められつゝあるかを詳かに解りたいと思ふのであります。それは即ち今のわが國の女子教育問題に生きた解決を下すところの最も有力なる實際問題であるからであります。

先年(大正元年)私が米國に暫く滞在して居りました時、丁度其の時は今のウイルソン氏が第一回の大統領選舉の候補に立つて盛んに運動されて居る時でありましたが、愈々其の選舉の日

丁度私は紐育に居て其の市の選舉の状況を見ることが出来ました。其の日あの廣い街々は、當日の選舉の結果を知らうとする人々の爲に寸地も餘さぬ程の人出でありました。その群れには子供も居れば婦人も居る、娘も母親も老人も皆この問題に深い注意を拂つて居るのであります。一方には活動寫眞が逸早く其の日の投票を開く所の實況を撮影して、それを又直様映畫にして市民の注意を集めて居るといふ有様で、我も人もその報告を俟つて歡喜熱狂して居る様は、如何に米國民が其の國民的自覺を以て生活して居るかを示すものでありませう。私は又其の時は多く彼の地の舊知の家に泊り、さうして其の一家族と食事を共にしたのであります。其の頃のテーブルに於ける話題はいつも大統領選舉のことに依つて賑ふのであります。其の話は又幼い子供に至る迄それ相當な興味を以て傾聴するのであります。

私は此の時、どうも米國々民は國家的意志、國民的意識に目醒めて居る國民である、國家は自分達が集つて互に組織して居るのである、といふ十分なる責任感があるといふことを感ぜずには居られなかつたのであります。

斯くの如く國民に國家觀念が徹底して居るから、例へば大統領選舉の落着がついて内閣組織が出来上つても國民は決して政

治の責任を獨り内閣にのみ歸しては置かない。其の内閣は如何なる政治をするか又如何なる理想を抱いて如何なる施設を企てるかに就いて熱心なる注意と誠實なる態度を繼續するのであります。つまり全國民舉つて直接に或は間接に其の國家の政治を執るのであります。故に若し時の内閣にして國家のためにならぬ政治を行ふやうなことがあれば國民はあらゆる方法を講じてこれを改めさせる、さうしても尙改められない時は國民はこれを輿論に訴へて行く、即ち國民は國家の爲ならば遂に當局者をも支配して行くといふ有力なる爲政者であるのであります。

これを教育の上に見ても同様であります。國家の大學の總長にして若し其の施設方針が間違つて居たり又議會の協賛を経た所の教育費の支出では必要な講座が開かれないといふやうな場合に、國民は次の議會を待たずして自ら議して必要に應じてこれを實行するといふやうなことがあるのであります。即ちレンダムであります。

米國は又今回の戦争に於ても大いに其の面目を改めて居るのであります。米國が今度の戦争に参加した當初に於ける軍人間の批評は頗る蔑視したものがありました。が近年に至つて其の批評は全然當らざるものであるといふことが明らかになつて來たのであります。殊に米國民に感ずべきことは、彼等は命令に

依つて働くものではなく、自分から働く、即ち自動的精神から身を以て國家に捧げるといふ熱烈なる愛國の念に充たされて居ることであります。斯くの如き國民としての自覺が全國民の心に充溢し覺醒して居ればこそ、今日の米國の態度に見る大國民の理想を實現することが出来るのであります。

今我が國の現状を考察して見ますと、これを外國の例に倣つ迄もなく、又古への歴史に見る迄もなく、現に社會の活問題はさまざまの局面を我等の眼前に提供して我等の注意を促して居るのであります。先づ我が國が今次の歐洲戦争に参加して常によく其の正義の戦に克勝つゝあるか否かは、國民として日夜に忘れることの出来ぬ問題であります。此の際國內に於ては内閣更迭問題が八釜敷火の手を舉げて遂に今次の原内閣の成立を見るやうになつたのであります。この原内閣とは如何なる性質のものであるか、又其の閣員は何人に依つて組織されたか、其の理想とは如何なるものであるか、惹いて今我が國の教育問題は漸くこれから其の改善の實行期に入らうとして居る此の時に當つて、其の當局者は如何なる理想を以てこれに當らうとして居らるか、其の政務官としての長官次官はどういふ人々に依つて成されたか、斯ういふ問題は苟も國民的自覺に醒めたる人々に對しての捨て置き難い興味ある活問題であります。こ

の意味に於て、この問題が果して幾何の我が國婦人の頭腦を領して考へられて居りませうか。

婦人も亦國民的自覺に目醒めたといふならば、斯ういふ政變に際しては帝國の將來に對する希望も起る筈であるし、乃至又今秋の臨時教育會議に於ける女子教育問題等は直接婦人の運命に關する、婦人として最も重大なる問題であるから、之に對しては當然深い注意が拂はれて居る筈であると考へられます。果して如何なる程度の理解を以て此れ等の問題が我が婦人界の間に取扱はれて居りませうか。

これに就て私は婦人自身の態度の表明を俟つものであります。

〔「家庭週報」第四百八十七號〕大正七年十月

女子高等教育の必要

家庭生活の進歩

教育の進歩普及と共に、人の生活に對する趣味嗜慾益々發達し、家庭生活に對する註文も従つて複雑高尙に赴いて來て居る。家屋にせよ、衣服にせよ、食物にせよ、裝飾にせよ、はた修養や教育の設備にせよ、總て皆舊套に安んぜずして、更に高

尙にして意義あるものを要求して居る。此の間に立つ主婦たるもの、用意は決し淺薄粗笨なることを許さぬのである。

科學工藝の發達の結果は、家庭生活に多大なる變化を及ぼして居る。電氣瓦斯等の應用だけでも、どれだけの影響を與へてゐるかを顧みたならば、文明の進歩と家庭生活との關係の如何に緊密なものであるかを解することが出来るであらう。實に生活の方法に於て益々便利精緻なる發明續出し、他面には愈々複雑豐富なる材料が供給されるのである。而も此の如き文明的方法と材料とは一面に於て頗る銳利微妙なものであるから、若し其の原理と規律とに精通せずして、徒らに之を濫用する時に於ては、或は非常なる徒費となり、或は危險を醸し、寧ろ却て文明の爲に生活を害されることになる。此の現象は即今寧ろ甚だ多く見られる時弊ではないかと思ふ。

此の如き時代に處して家庭生活を有利に有効に導き、文明の利器をして十分に其の價値を發揮せしむる爲には、之に對する相當の準備を要すること論を俟たぬ。即ち家庭經營の爲にも女子の高等教育は必要なのである。

女子教育の普及

近年に於ける女子教育發達の趨勢を見るに、高等女學校の教

育を受ける者の数は著しい増加を示し其の校数は實科を加ふれば四百以上に上らんとして居る。

此の趨勢から推せば、高等女學校生徒數は、中學校生徒數に比して常に下位にあらざるのみならず遂に或は之を越ゆるに至るべきを豫言する事が出来る。何となれば中等實業教育機關、技藝教育機關の發達するに従ひ、男子の之に吸收せらるゝ者著しく増加すべきも女子は之に伴はずして、普通教育を受ける者が依然として多數を占むべきであるからである。此の如く女子の中等教育が發達する時に於て果して何時までも高等なる修養教育及び學術教育を要求しないであらうか。

吾人の見る所に依れば、中等教育の普及するに従ひ、高等の修養教育及び學術教育を要求する女子の數は著しく増加し來るであらうと思ふ。中等教育の普及によつて一般社會文明の刺激を感受することの出来るやうになつた女子が増加するに従ひ、その文明を理解し受用せんが爲に更に高等なる教育を要望するものゝ多くなるのは洵に當然である。此の當然の要求が女子に限つて沮止せらるべき理由は毫末もない。從來に於ては、多數の女子が高等教育に對し熱心なる要求を示さなかつたし、社會も亦必要ならずとして其の發達を閑却した傾があつたが、今後に於ても長く此の傾向を續けざるべからずとするが如きは固よ

り不自然である。

男子の思想の進歩

男子の活動の裏面には必ず女子の力があつて、隱然之が援助保護に當つて居る。その女子の人格、識量材能の優劣如何は、男子其人の活動に影響するところ決して少くない。思ふに今後文明の進歩するに従ひ、家庭以外の社會的事業に於て、女子の協力を要することが益々増加するであらう。女子の協力を要する事業事務の範圍が廣まるのみならず、その性質に於ても高尚に精緻になつて行く。是の如き場合に於て、女子の學識淺く見界狹くして男子の話し相手にもならず、唯其の指揮に依つて小間使の役目を務めることが出来るだけでは男子の不便此の上も無いのである。

從來男子は女子を以て慰藉者であると見る傾があつた。女子は固より決して男子の慰藉者ではない。別に獨立の任務を有する獨立の人格である。併し相互的の意味に於て、即ち男子は女子の慰藉者であると同時に女子は又異なる方面、異なる方法に於て、男子の慰藉者であるとする事は出来る。而して單なる慰藉者と見ても、若し女子の人格的價值が餘りに男子と隔たり其の感情の理解融合を缺く場合に於ては、到底十分なる慰藉の効

果を擧げることが出来ないのみならず、却て邪魔になり徒に煩累を増すに止まるものが少くないであらう。女子が男子の慰藉者としての任務を十分に盡すことの出来る爲には、どうしても男子の思想感情を理解し、適當な手段を講ずるだけの修養を積まなくてはならない。たとひ男子の慰藉者としては奏効しても、世間に往々見るが如く、全く男子の玩弄品となつて自ら覺らざるが如きに至つては、これ女子としての人格を放棄したものであつて、墮落の甚だしきものと謂はなくてはならぬ。女子としての品格を損せずして、而も十分に男子の勞苦を慰藉し、男子の幸福を保護する爲には、必ずや相當の修養を要するのである。殊に文明が進み男子の智徳の高まるに従ひ、玩弄物に等しき無智な女子に快樂を求めずして、思想趣味の豊富な女子に慰藉を見出さんとする傾向が著しくなつて來て居る。此の點に於ても女子が高等の修養を積むべき機關の存在を必要とするのである。

女子職業の發達

女子が社會に出て活動する傾向は急劇に増大してゐる。此は文明の進歩に伴ふ必至の現象であつて何者もよく之を阻止することは出来ない。而して女子の社會的活動を促す原因は種々あ

るが、之を大別して二つの主要なる條件を指摘することが出来る。

その一は社會の發達の結果、その組織は緻密となり、その事務的分化が精微となつて、女子の手を要する範圍が漸次廣まつたことである。教育、衛生、經濟、通信、工場等に於て、今日如何に女子の手を必要としてゐるか、これ等に關する諸機關から若し急に女子の手を抜き去るとすれば、縱令全く其の運轉を止めるまでに至らないとしても、甚だしき澁滯を生ずることは必然である。男子を以て代へることは不可能でないにしても、女子を用ふる方が有利であるとせられる場合が多く、而して女子を有利とする仕事は益々急劇に増加してゐるのである。一定の組織機關の下に傭はれて勞作してゐる女子の外、獨立して、若くは私宅に於て、同様に社會的需用の爲に活動して居る女子の數も亦固より少數ではない。而して社會は又此等の女子の貢獻に待つところが頗る多いのである。

その二は生存競争の劇烈に赴いて來ることがあつて、之が爲に家庭から社會的職業に向つて驅り出される女子の數が次第に増加しつゝある。現今女子にして高等の修養教育を希望する者の増加するよりも、職業教育を希望する者の著しく増加しつゝある事實は、女子の生活に對する社會的刺戟の性質の何たるか

を説明するものと見なければならぬ。此の傾向は將來決して緩
和せられざるのみならず、益々甚だしかるべきは今茲に斷言し
て差支なき事柄であらう。

活動範圍の擴張

此の如くにして、現在に於ては十人以上を使用する工場の職
工中半数以上は女子であるが、十人以下の工場は又極めて多数
である。遞信、大藏、鐵道院などの女子事務員及び醫術開業試
験に及第したる女子の數、其他私立會社商店等に勞働して居る
女子の數も決して少くない。

女子の社會的活動、之を狭くしては種々の職業に従事する者
が此の如く増加する以上は、兩方面の要求からして、女子高等
教育は必要のことゝなる、一は此等多數の職業に従事する女子
の指導者、監督者、保護者となることの出来る修養を具へた女
子を要するが故である。女子特有の性質を知り、其生活を解
し、思想感情に同情し、衛生生理の事に、教育修養の事に、特
殊の利益を計るには、必ず女子其人の技能を借りなければなら
ない部分がある。それ故女子視學官、女子工場監督官、生理衛
生委員等の如き仕事に従事する女子は、必然に要求されなけれ
ばなるまいと思ふ。外國には既に多くの實例があるのである。

而して此の如き需用に應ずる爲には、必ずや高き修養訓練を經
なければならぬ。更に女子の社會的生活範圍の擴張されるに從
ひ其の程度も次第に上昇して、唯職業に従事するが爲にでも高
等教育が必要となり、既に外國の最高學位を獲得して更に本邦
の學位を要求せんとする女子もある位である。此等の女子の爲
に修養機關たり研究機關たるべき最高學府を準備するは、國家
として當然のことではなからうか。

國家社會の發達

國民の人格の優秀といふことは國家發展の最大資本たること
言ふまでもない。然るに國民の人格の優秀といふことは何によ
つて得られるか。男子のみが優秀になつたとしても女子の人格
が之に伴はなければ國民全體が優秀になつたといふことは出來
ない。且又男女といはず凡て國民たるものは、一人として女子
の身體と精神との影響を受けないものはない。して見れば國民
の人格に於ける女子其人の影響は頗る重大なものであつて、女
子の教育を進め、善良剛健、聰明達識の國民を教育するに足る
べき母たり妻たる女子を養成することは、國家の發展上缺くべ
からざる要件とせねばならぬ。

米國等に於て高等教育を受けたる女子の結婚率及び出産率が

減少する傾のある事から、高等教育は知識の進歩には効果があ
るが、女子の生活的素質を劣悪にするものであると論結して、
女子の高等教育に反対する者がある。併し此の統計は職業問題
其他と關聯して居るのであつて單純に教育問題としてのみ解決
は出来ない。よし又數歩を譲つて、其が教育の結果であると假
定しても、極めて少數の優秀女子が己の天職の適性を發揮する
爲、又同時に國家全般の優勝の爲に、人格の量を採るべきか又
其の質を採るべきかは、餘程の問題である。結婚率出生率に多
少の減少を來しても、其を償うて餘りある社會的功率を發揮す
る事が出来るならば可いではないか。況や如何に高等教育の自
由を許しても之を受ける者は實際國民中僅少の部分に止まるを
や。

次に社會組織の鞏固にして圓滿なることを得る爲には、その
社會を成す全員の思想感情が互に理解融合されなくてはなら
ぬ。然るに社會の各半部を占めて居る男女の間に、思想感情の
理解がない時は遂に圓滿なる結合を缺き、社會は分裂不具の狀
態を達せざるを得ないであらう。故に社會をして圓滿完全なる
進歩を爲さしめんとするには、女子をして男子と共に、互に理
解し同情せしめ、共通に利害を感じしめ、協同戮力して社會の
組織運用の責任を負擔することの出来る資格を具へしめなけれ

ばならぬ。而して女子をして此の如き資格と力とを具へしめる
爲には、必ずそれに相當する教育を與へなければならぬことは
勿論である。男子と全然同一の教育を受くべしと言ふのでは無
い。唯同一程度の教育を受けることの出来る途を開き、男子が
男子としての能力を自由に教養されるやうに、女子も女子とし
ての能力を自由に教養されて、社會員としての貢獻を完うする
やうにせしめなければならぬ。

最後に最も注意しなければならぬのは、戦後に於ける世界の
形勢である。思ふに戦後の各交戰國は全力を擧げて國力充實に
熱狂し、之が手段として海外發展に全力を集注するであらう。
かくて從來よりも更に猛烈なる平和的競争を惹起すべきは國民
の豫期しなければならぬ所である。此の如き間に在つては、女
子も亦男子を助けて家庭以外の社會各組織の間に入り込み、國
家の進歩に貢獻しなければならぬ。従つて女子の社會的活動の
範圍は非常に擴大され、必然に亦其の準備的教育の要求は擴大
せられざるを得ないのである。

〔婦人新聞〕第九百六十二―三號 大正七年十一月

阪谷評議員披露會席上にて

本校も創立以來既に二十餘年を經過し、創立當時から御盡力下すつた方々始め、段々評議員諸氏の數も増えて來たが、比較的少壯の人即ち創立者の後繼者となるべき若い人が少い。そこで財務委員の澁澤男や森村男が心配されて、今から有爲の人を造つて學校の基礎を作り、財政の基礎を固めて行かねばならぬといふ事から、殊に久保田男爵の如きは熱心に盡力して、其の一人に阪谷男爵を推したいといふ話が出て、大隈侯爵始め其の他の人々も滿腔の賛成を以て遂に今回男爵を本校の評議員に推薦する事になつたのである。

そこで私は男爵を御願ひしたに就いては第一に此の學校が將來發展するに就いて、例へば今後十年の間に綜合大學に進めて行かうといふ希望に對して大いにその御力を借りたい事と、も一つは最も深い意義があるのである。即ちそれは精神的の意味に於ける世繼ぎになつて戴きたいといふ事で、本校の永久の意志精神、形の背後に隠れてゐる有機體即ち女子大學の世繼ぎ者となつて戴きたいといふのである。學校の形を保つて行くには校舎、設備、基金といふやうなものも大切ではあるが、それは大學の生命ではない。如何に形體が整ひ設備が成就し綜合大學に成り、盛大になつても若しその精神、創立の意志が鈍れてゐたならば、此の大學は死物である、死骸である事を忘れてはな

らない。吾々が評議員を推薦し、教職員を詮衡する時に最も顧慮する處はこゝである。即ちこの大學を共に育て、行かうといふには先づ第一に此の精神の繼承者でなくてはならぬのである。此の意味に於て吾々は喜んで男爵を本校の評議員に願つたのである。かくの如き有力な評議員を此の大切な時に於て得た事は一同の喜ぶ處で、又此の學校の將來の運命のために一つの大きい力を加へられた事として喜ぶのである。

併し男爵は公事に非常に多忙で、今後も支那の財政顧問として、又國家の代表者として、支那に於ける大使命を持つて居らるのであるから、其の全力を本校のために注いで戴くといふ事は出来ないが、併し事情の許す限りに於て、大いに國家活動の中樞たる精神教育の土臺を培ふ事に御盡力下さる事を希望してやまないのである。

〔家庭週報〕第四百九十五號 大正七年十一月

今年掉尾の快事

十一月十一日！ 記憶し易い日であります。この日は世界の歴史に未曾有の世界大戦争の休戦の調印を了した日であります。この休戦は殆ど凱旋の意味を持つた休戦であり、勝利の事

實を確實にした休戦であります。即ち獨逸はその艦隊と又軍需品の悉くを聯合軍に引渡し、又防禦の要塞悉くを解き、これを個人でいへば、武装を解き、劍を渡し、銃を棄て、全く抵抗するに必要なる武器のすべてを擲つて降参の誠意を表した。敵にとつては不名譽の休戦であります。斯くして獨逸は再び立つ能はざる状態となつて休戦したのでありますから、聯合各國は、否世界は、この條約調印を以て正義の勝利を祝福するに十分なる意義を持つのであります。

省みれば、この世界戦争が勃發して以來全四年有半、世界はこの戦ひに集注したのであります。我が帝國も亦その正義の軍に参加して、獨逸の占領地となつて居つた支那に於て、又軍艦は遠く地中海に出動し、陸に於ては西伯利亞に出兵したのであります。抑この戦争は何の爲に、否この世界は何の爲にこの多くの犠牲をこの爲に拂つたのでありませうか。さうしてこの戦をした爲に今後の世界はどう變つて行きませうか。又人間の幸福、世界の文明は今後如何に進展して行きませうか。人々はいこれ等のことを想像して感謝と希望とに交々満ちて居るのであります。まことに砲煙に閉ざされて居つた暗黒の世界は今日漸くその終りを告げて、今將さに東天は白んで光明世界の曙光を仰ぐのであります。暗黒の夜は去り、眠れる者は醒めて、次

ぎに来るべき光明の世界、晝の世界を迎へるのであります。多くの犠牲はこの爲に拂はれました。休戦の祝賀はこの意義を以て行はれるのであります。

今又私共は今日の休戦を感謝し、又將來に多くの希望を寄すると同時に、又この戦争によつて行はれた多くの罪惡に對して深い懺悔の念を禁ずることが出来ないであります。即ちこの世界の戦争によつて人類の美しき動機が發揮した一方には、又非常な罪惡も行はれたことは事實と見ねばなりません。さうして私共は國民として又人類としての同胞關係又は互に共同の生活を営むものゝ離るべからざる關係を持てると同じく、この世界の出來事に對してはすべての責めを擔はなければならぬのであります。この意味からして私共はこの戦争の正義の勝利を歡喜感謝すると同時に、過去の罪惡に對する懺悔を忘れてはならないのであります。

この戦前に於て私共は夙に眼に見えぬ戦がこの世界に起つゝあることを察知することが出來ました。さうしてその戦は遂に正義の勝利となるべきことを確信したのであります。今この世界戦争の結果を眼前に見るに至つていよくこの確信の確實なることを證明せられたのであります。實に今度の戦争は、無形にして見るを得ざる精神力を明らかに現示し、從來の

假説を正に現實に確定したのであります。即ち理想を實現したのであります。茲に正義の勝利は實に明確な事實となつて表れたのであります。私共はどこ迄もこの理想を標榜して進むに躊躇することはないのであります。併し尙この時機に私共が最も熟慮を要することは、今日の休戦状態を以て全く戦争の目的を成就し、聯合軍の理想を悉く實現し得たといふことは未だいひ得ないのであります。

即ちそれは言ふ迄もなく、今後の講和談判の結果に見なければならぬのであります。又この戦後の世界が如何に改善される、かに見なければなりません。されば今日我々がこの休戦を祝賀する意味は、過去の世界人類の努力に感謝し、又その罪惡の責めを分擔し、さうして來るべき將來に對する心の用意を調べなければならぬのであります。即ち今日明示されたる正義の確信を、これを將來如何に實現するかに就いての用意であります。

來るべき戦後の世界に對する心の用意とはいふ迄もなく萬邦和衷の共同精神であります。即ち國際道德の精神を涵養することとであります。この信念を徹底せしむることとあります。さうしてこの國際道德の信念を涵養するといふことは、我が古來よりの所謂愛國心の涵養であります。

或人々は言ふ、國際道德——或は萬邦共同——人類歸一といふやうなことがどうして各々の祖國を愛する心に共通點を見出すのであらうかと、私はこれに答へて、「然り、少しの矛盾もなく衝突もなく全く同一のものである」といふことを憚らないのであります。わが忠君愛國の國民思想は、即ちこれを徹底すれば其所に人類共同、萬邦和衷の精神と相合致する點を見出すのであります。狹義なる愛國心、偏狹なる國民思想は決して其所に徹底することは出來ない。けれども、若し眞に國を愛し君を尊ぶ精神に生れた愛國心ならば、それは決して一國に極限されるものではない。そしてその道德は決して一民族の道德には限られない。必ず其所に萬邦の和衷、人類の歸一を實現するものでなければなりません。これを要するに、眞の愛國心は眞の萬邦共同の精神であり、眞の道德は必ずや世界的人類的に擴大されて行くべきものであらなければなりません。これをわが明治維新の國是に見るに「知識を世界に求めよ」と仰せられてあるのは、即ち先づわが國民の常識、國民の道德を世界的に擴大せよとの御趣旨と恐察し奉ることが出来るのであります。

然るに、最近の過去に於ける我が國民の思想傾向はやもすればこの御趣旨に遠ざかりて、知識は狹隘淺薄に、意識はあまりに極限さるゝかの如き感を抱かしむるものが少くなかつたの

であります。斯くては大正の今日、世界の大勢は新に覺醒して茲に萬邦和衷の精神を實現し、宇宙の正義に共鳴せんとするの時に當つて、獨り若しわが國民がこの思想を理解するに疎く、その共同に立遅れるが如きことを想像しなければならぬやうであつたらどうでありませうか。これを以て愛國の民たることが出來ませうか、これを以て忠孝の民たることが出來ませうか、實に自己人格の分離を來さなければなりません。私共は今日の如き世界共通に持つ祝賀の機會に於て先づこの空氣に接觸しなければなりません。さうして十分にその意義を明らかにし、又その大勢に觸れて眞に自己人格の改善に資し、眞に國風の充實、國際的精神の發揮に努力せなければなりません。

休戰調印の祝賀とウイルソン氏の聲明

時局は急轉直下の勢で今日の變移を見るに至りました。この功績は實に善き戰を戦つた聯合各國民が、一に正義の目的の下に國力を集注し、歩調を揃へて共同忍耐した結果であります。私共は今日この功績に對して感謝し同情し尊敬の意を表せんとするものであります。

さうしてこの内容を以て最も簡單に且最も意味深長に表明された言葉即ちわが陛下の聯合各國元首に發し給ふた御祝電、並

びに各元首からわが陛下に御答電のあつたそれ等の言葉に私共は最も共鳴を感じるものであります。これ等の言葉の意味を考へその精神の存する處を考へることが出來たならば今日、——戰爭勃發以來四年半の間、國力を集中し、共同忍耐した各國民の功績が自ら輝くのであります。

いふ迄もなくこの戰爭の勝利を得たといふ事は武器や腕力ではないのであります。精神の力を以て遂に人心に勝利を得たのであります。勿論腕力や武器や勝利を得たる一原因には違ひないけれどもこの力を奮ひ起したものは精神の力であります。それ等のすべてを犠牲に供して正義の目標の下に善き戰を戦はしめたものは精神の偉力であります。彼の白耳義國が若しもあの場合に國を擧げて犠牲とすることをためらつたならば、其の及ぼす影響はどうなつたことでありませう。併し勇敢なる白耳義はその犠牲を拂ふことに躊躇しなかつた、そして眞の精神を發揮したが爲に佛蘭西の士氣も亦大いに昂つた、英國も遂に人道の爲に傍觀するに忍びなくなつた。亞米利加も亦その精神に醒めて遂に立つた。といふ風に小弱國白耳義はその強い精神を以て遂に世界を動かしたのであります。戰の勃發した時先づ殉難したのは白耳義であつた、けれども亦遂に最後の勝利者となつたものは白耳義であります。一度國土を蹂躪され瓦解された白

耳義は、今や再び首都を建設し、皇帝は榮譽の凱旋をされたのであります、のみならずこの精神こそは世界を動かし人道正義に生かしたものであります。

戦前と戦後

戦前、世界の傾向は實にその一國の統一さへも難事であるらしく見ねばならぬ事實が少からずあつたのであります。然るに戰爭勃發以來世界はこの精神によつて初めて醒まされたのであります。この精神によつて初めて國力を集注し世界が一つの目的の下に共同することが出来たのであります。英國も佛蘭西も國の壯丁の半數を失つても、尙人道の爲に戦ひ續けた勇敢なる行動は一にこの精神の生命に生きんが爲であります。この精神を背後にした聯合各國の活動は實に目醒ましいものであります。これが軍隊の行動に表れては秩序整然として一糸亂れざる態度となり、これが信仰となつては實に何物をも動かさずしては止まない熱誠となつたのであります。

この態度を支持して遂に今日の勝利を得るに至つたことは、もとより各國民の勇氣に充ちた精神によることであります。この國民を統一指導した各國元首及び大統領のその熱誠、その聰明なる判断に俟つことはいふに及ばないことであります。さ

うしてこれを軍隊の行動に於て指導した功績は總司令官フォッシュ將軍の功に附さなければなりません。その將軍の深い思慮と巧妙なる智慧は、最初は動々もすれば聯合軍をして弱きが如く傳へられ、惹いては將軍の指揮にも批難を加へる人々も少くなかつたのであります。彼の精銳當るべからざる敵を挫くには將軍の思慮智略を以て計畫された如く、最初に犠牲を拂ひ、さうして最後に急擧して攻勢をとつた即ち幾度もその擧に出た袋攻めは、最も功を奏して居るらしく思はれるのであります。兎も角もこの敵の勢を挫き、味方の統一を少しも弛めず、最後迄機先を制して進退宜しきを得たといふことは、このフォッシュ將軍に功を歸せねばなりません。それと同時にこの戰爭の目的を確立し、その理想の實現を有効ならしめた功は米大統領ウィルソン氏に歸せなければならぬことと思ひます。この事は今委しく説明する迄もなく誰も認めて居ることであります。殊に今度聯合軍がこの休戦條約に調印して、物質的にも精神的にも最後の勝利を博した意味内容に就いて、その調印の翌日直ちに米國上下兩院に於て聲明したる大統領の演説は實に十分にこの休戦の祝賀すべき意味及びこの戰爭の動機目的に就いて表明するものであります。斯くの如くにしてウィルソン氏は實に戰爭以來幾度か大演説を試みて大勢の向ふ所を世界に宣傳したの

であります。その理想目的の崇高にしてその判断の明敏なることに實に歎賞措く能はざらしむるものがあります。今左にこの演説の一部を摘録いたします。

米大統領聲明

「……大戦亂は斯くて遂に其の終局に到達したり。如何となれば獨逸は此の條件を承認したる以上再び戈を構ふる事不可能なるべければ也。今日に於て偉大なる此の結末の結果影響如何を斷ずるは難し、然れども吾人は知る、一國より一國に燃え擴がりて遂に全世界に及べる大戦火が愈々茲に終焉を告げたる事を……。」と。

又曰く「昨日迄獨逸の實權者たりし人々の抱懐したりし、武裝の帝國主義の目的が遂に悲惨なる最後を遂げ、彼等の不當なる野望が遂に水泡に歸し去れるを知る也。誰か果して武裝的帝國主義の復活を冀ふ者ぞ、曾て祕密裡に且自己一家の好む所に從つて恣に世界の平和を攪亂し得たりし獨逸軍閥の專横權力は、今や世界の信望を失ひて覆滅を遂げたり。然れども吾人の完成したる所は單に之に止まらず、之を外にして尙更に遙かに重大なる或物あり。何ぞや武裝的帝國主義を覆滅せんとして相協力せる各國家が不偏の正義——目下の協力以上又は列強の利

己的打算以上、更に好く更に恆久的なる或物に基礎を置ける解決案に包括せらるゝ不偏の正義に對する、全世界の欲求を満足せしめ得る平和を建設せんとして、同一目的の下に相協力するに至れる事即ち是也。今日となりては最早戰勝各國の抱懐する目的に就いて揣摩臆測を敢へてするの要あらば、彼等の誓約せる共通目的は満足に價ひすべきものにして、強者に對して正當の權利を與ふると共に一方弱者に對して保全の策を建つるを以て其の要となす。戰勝各國政府の感情意思は極めて特異的形式にて既に表明せられたり。ヴェルサイユ最高軍事會議に出席せる各政府代表者は滿場一致を以て一決議案を可決し、獨逸國民に保證するに事情の許す限り最善を盡して彼等に食糧を供給し、以て獨逸國內各所に於て國民各個の生活を脅かしつゝある悲惨なる窮乏より彼等を救ひ出さん事を以てし、白耳義に於て吾人の行へると異ならざる懇切を以て獨逸國內の救濟事業を組織する爲直ちに必要の手段を執るべしと云へり。中歐帝國の諸船舶を使用せば彼等壓迫されたる住民を直ちに慘憺たる境遇より救濟し、彼等當面の問題たる重大任務即ち政治的建設に向つて彼等の精神と氣力とを集注せしめ得べき也。飢餓は改革を産まず、飢餓は狂亂其の他改革を不可能ならしむる嫌惡すべき氣質を産む。中歐帝國には、今や政治上の變革のみならず革命も

來れり。而して此の革命たるや、最終的の秩序ある政府を實現せしむる革命に非ずして、結局思慮ある人士が何れの政府及如何なる政府と平和條項決定に關し交渉すべきかの問題を發するに至るまで浮動常なき状態を醸すべき革命なり。彼等は吾人に如何なる保證を提供せんとするか、如何なる保證を以て彼等當事者は其の約する所に隨はんとするか、如何なる保證により今や吾人の交渉の圈内に入らんとする國際協定を維持せんとするか、是蓋し頗る憂懼すべき問題也。平和締結さるゝの日吾人の約束と交渉との外何人の約束と交渉との下に平和が實行さるべきや。吾人をして卒直に語らしめよ。吾人は是等の問題は目下或は即時に満足に解答し得ざるを承認す。然れども吾人の意味する所は近く充分なる解答を得るの希望無しと云ふにあらず、當に然るのみならず吾人は目下行はれつゝある事柄に於て吾人の心を安んぜしむる所の凡ゆる大なる希望と信頼とに對し、忍耐と援助と注意とを以てせざる可からず。(中略)

又曰く、武力を以て征服するは一時の征服のみ。徳を以てするは永遠の征服を行ふなり。自由の制規を習得し自ら能く秩序有る國家を成立せしめたる國民は、今や友情的援助實例の強烈なる勢力に由り世界征服を行はんとするものなる事を予は確信す」(後略)……

今日の戦争の目的は一國の利害得失を云々するものではない。又横暴に數ふるに横暴を以てするものでもない。彼のウィルソン氏の聲明の如く、この戦は實に人道の表現を目的とするものであります。國際憲法、國際道徳といふものが事實に於てこの世界に實行され、眞に文明世界となつて人類の安寧幸福を増進するといふこの理想を實現せんとすることの外に何の野心もないことを今日の事實に於て證明するものであります。人々は最早、何故この戦を正義の勝利といふかに就いて疑ひを挿む餘地がないのであります。即ち四年半に亘つて事實に現れた各國の動機又その戦争行爲は何れが邪か何れが正か、今日は既に白熱の光りを以て明らかに現示されて來たのであります。罪惡を逞しふする暗黒の世界は過ぎ去つたのであります。

初めて世界改造の本問題に入る

私は今から七年前即ち丁度戦争の勃發前に於て歐米漫遊の途に出ましたが、其の際獨逸には一箇月程滞在しました。極短日月ではありましたが、私は出来るだけ獨逸といふ國家及び國民性について研究的觀察をして見たのであります。其の時私は獨逸の文明が物質に偏しその氣風が如何にも軍國的で、その國家組織が全く機械的であることを感じたのであります。

然るに我が國ではその當時も獨逸崇拜熱は非常なもので、さういふ缺點などには少しも氣付かないかのやうである。のみならずどれだけ獨逸の爲に毒されて居るかも知らない。——かの黃禍説を稱へて日本を世界に誤り傳へたのも獨逸、其の他日米關係、日露關係、日支關係さういふ問題の間に立つて直接間接に日本の不利益を説いたのも皆獨逸であります。獨逸は實に日本

の爲にどれだけ禍したかわからないのであります。否獨り我が國のみならずこの獨逸禍を蒙らぬものは殆どないといつてもよいと思ひます。世界を物質化したのは矢張り獨逸、世界平和を攪亂したのも矢張り獨逸、獨逸の道德は道德ではないのであります。そして今度の戦争はこの平和攪亂者を征服し、世界の安寧秩序人類の幸福をとりかへしたのであります。私共はこれを正義の勝利といはざるを得ないのであります。尚併し、負け惜しみのことをいふ人は聯合軍の態度といへども批難すれば必ずしも完全ではないとして攻撃する人もある。無論人間世界に完全無缺といふことはない、けれども益々正義に近づき、善に近づき、益々從來の弊とする所を改めつゝあることは、戦前の世界に比べて慥に世界的良心に醒めたことは、今日否定することの出来ぬ事實であります。又戦前獨逸が如何にその傲慢不敵の態度を以て非人道、非道德を敢てその國民に鼓吹し世界を

毒しつゝあつたかはその國民に唱はしめた獨逸國歌に見ても明らかであります。否國歌のみに止まらず、宗教にあれば政治にあれば世界人道のすべての上に悉くその權力意志を擴大し、その擴張に都合よく自國の法則を建設して、國民を機械的にしその國家的野心を逞しうしたことは獨逸のあらゆること、あらゆるものに標榜されて居るのであります。

この思想は實に世界を如何程毒したことでありませう。例へば、人間が生活して行く上にも單に一人と一人の關係に於てさへ、又は團體的精神に生きなければならぬ學校の校風などといふものゝ上にも、若し其の中に一人の利己的分子があつたならば、その人々の關係、其の團體の精神は遂に害はれ、遂に生命を失ふものになりますのであります。一人の利己者が如何にその社會の關係を毒し、その團體の生命をきずつけるか量りしられないのであります。それと同じくその世界に獨逸といふ野心家があつて、その凡ての力をこの世界に弄したが爲に世界はどれだけ害せられ妨げられつゝ今日に至つたことでありませう。彼の物質文明の弊害にのみ陥つたこと、さうして人をして遂に「天道是非か」といふ迄に懷疑に陥れたのも皆この獨逸の利己的野獸的行爲が然らしめたのであります。

今度の戦争はこの野心家を征服したのであります。この思想

を征服したのであります。

聯合國はそれに向つて戦つた、さうして遂に勝つたのであります。さればその不義は憎むけれども其の國民を孤立せしむることを欲しない。正義の行はれる世界、人道の實現さるゝ世界に參與せしめたいといふ寛容なる態度を以て今後の世界に接して居るのであります。私共はこの意味に於て今日の勝利を益々愉快に、益々歡びに感ずるものであります。

尊き犠牲の賜

併しながら、この歡喜、この祝賀の意味は最も沈痛に考へなければなりません。何となれば、この平和の曙光を見るに至つたのもとより偶然ではないのであります。聯合軍は何れも國家を賸してこの戦に加はつたのであります。この戦争に死傷した數は三千八百萬人と稱へられて居る。その内戦死者は一千萬人を算へる。あゝこの一千萬人！ 國家の爲、人道の爲に殞れたこの一千萬人は、將來益々有爲なる青年、國家の爲に人道の爲に實に惜しむべき人格を備へたる人々の多くであります。この爲に悲しむのは家族朋友のみならず、國家、否世界はこの犠牲者の爲に萬斛の涙を禁ずることが出來ないのであります。今日この戦争を祝する私共もこの犠牲者を思ふ時涙を以て感謝し

同情し敬意を表するものでなければなりません。

犠牲はこれのみに止まらない。其の他三千億といふ金を浪費し、幾世紀蓄積した文化を互解した事は計數を以て示すことが出來ないのであります。彼の白耳義の如き、實に慘憺たる有様になつたのであります。併し白耳義は殞れたのではない。この犠牲を拂つて世界を立たしめたのであります。同時に白國も亦永久の生命に生きたのであります。先頃皇帝は休戦後間もなくその國都に歸り、再び國會を建設されたといふ實に歡ぶべき報道であつたのであります。私共はこの歡喜の日にもこの犠牲を忘れてはなりません。

眼に見えぬ戦ひ

今一つ忘れてならぬことは今後の世界に對する用意であります。成程今は世界の大戦も靜まつて初めて平和の曙光を見ることが出來る世とはなつて來たのであります。實はこれからが眞の戦争であります。何となれば人心の改造、世界の改造はこれからが漸く本問題に入るのであります。今迄は其の問題に向つて世界が協同一致することさへ出來なかつた。併し今は世界がどうしても改造されなければならぬといふことに氣がついて來たのであります。その意味からいへば獨逸といふ小野心家が

自らその野心の犠牲となつて世界の良心を醒ましたやうなものであります。今度の戦争によつて世界の國々はこの戦ひの動機を明らかにしその國家的良心或は國際的良心をどれだけ涵養されたことでありませう。殊に米國に於ける教育——殊に社會教育に於て——は十二分にこの精神の涵養に努めたのであります。大統領ウィルソン氏の公明なる聲明、又ハーバードのエリオット博士、コロンビヤのバトラ博士の如き實にこの思想宣傳の驍將であられた。

これ等の運動について世界は最近容易に信ずることが出来なかつた爲に、或は世界に平和が来る、又軍備を縮少するといふこと、又は國際聯盟といふことそれ等はすべて空想の如くに考へられて居たのであります。それが今度は實現されるやうになつて來たのであります。バトラ博士の言に「平和は單に理想ではない、理想の遂行である、現世界は最早その實現の狀態になつて居る」と。

實にその通りであります。恆久的平和といふことは到底熟語の出来ないことのやうに思はれて居たことが今度の戦争の結果遂に實現されるものであることを確められたのであります。

〔「家庭週報」第四百九十五號、第四百九十七號〕

大正七年十一月

戦後に於ける世界の形勢と

女子高等教育の趨勢

近世に於ける教育の普及、産業科學藝術の發達、社會組織の複雑化等、一般文明の進歩に伴ひ、國家社會家庭の生活を之に應じた有効有利に開展せしめんがために、女子と雖も文明最高の修養に與かるべき機會を有するの必要はいふまでもない。而して又此の如き事情は自然に婦人の地位の上進活動範圍の擴張を來し、その結果婦人自ら其の地位を保持し、利益を増進せんがために、益々高等の教育を要求するに至るべきは、歐米の現状を見ても知ることが出来るのである。而も此の趨勢に對し最も重大な影響を持ち來すものは恐らくは戦後に於ける世界進歩の形勢であらう。

大戦争後に於ては、交戦各國は精神的にも經濟的にも非常なる疲弊を來し、其の創痍の癒えない間は外に向つて活動することは爲し得ぬであらうと觀察する人もあるのであるが、多分はそれと反對に非常なる忍苦努力の情勢と、民間に散布せられたる資金と、創痍を回復せんとする苦心と、及び對手國に優勢を持たせんとする慾望とは相俟つて、非常に猛烈なる世界的活動

を試みるに至るであらう。又若し戦争のために大利を博した國があるとすれば、その有り餘る資本力を以て更に世界的の各種事業に活動するであらう。

是故に戦争の爲に或る方面には多大の創痍を残すであらうが、他面に於ては、學術産業政治教育、其の他萬般の社會事業に刷新改革を加へ、進歩擴張を見るに至るべきは、恐らく期して俟つことが出来ると思ふ。而して交戦列國は戦後數年は國力充實の爲に全力を擧げて熱狂し、之が手段として海外に發展を競ふであらうし、國力の充實した後も、亦更に海外發展に力を盡すであらう。此の如くにして、戦後に於て、遠からず從來よりも更に猛烈なる平和的競争を惹起するといふことは、國民の豫期して以て準備を十分にせざるべからざるところである。

此の如き狂熱的活動、世界的競争の間にあつては、常に男子の事業と努力の範圍とを擴大するのみではない、女子も亦近代の傾向を更に大に擴大して家庭に於ては勿論家庭以外社會の各種組織機關の間に入り込み、適當なる仕事を引き受け、重要な働き手として男子を助け、國家の進歩に多大なる貢獻を加へるであらう。此は女子其の人が周圍の刺戟に感ずる自然の發動に因るのみならず、國家社會は強く之を要望するのである。勿論これとて別に新しいことではなくて、唯從來既に爲し來つたこ

とを、戦争の刺戟の爲に著しく増大するまでである。

女子活動の範圍を擴大せんとする趨勢に對して、大なる原因となるべきものは、戦争直接の結果である、戦術家の概測に依れば、開戦以來の人員傷害は一千數百萬を超えてゐる、而して其の中死者は三分の一乃至四分の一あるが、死者ならざるも、重傷のために廢疾者となつて、復完全な一人として社會に立つ能はざる男子は幾百萬を以て數ふるであらう。戦争の終極までには更に又幾何の増加を見るか固より測り知らない。而して此の如く戦死傷の爲め社會から退く男子は、悉く皆選抜されたる有爲の壯年者であつて、心力に於て體力に於て一騎當千の資格を有するものであるから、社會は之がために活動力の缺陷を生ずること頗る多大なると共に、平生に於てすら婦人の過多なる歐洲諸國に於て又幾百萬の婦人は、其の理想の配偶を失ふことゝなるのである。其の結果として、一方に於て、其の活動力の要素を男子に失つた社會は勢ひ其の補充を女子に向つて求めることゝなるであらう。又一方に於ては、壯年にして其の配偶を失ひ、家庭を構成する能はざるに至つた女子は、其の獨立活動の位地を、進んで社會に求むるに至るであらう。固より男子の位地の全部を女子が補充することが出來ず配偶を失ふ女子の全部が直に職業を社會に求めるとは限らないが、併し此の傾向

は到底呑み難いのである。

戦争の創痍恢復に對する猛烈なる努力の欲求は、國家としても、家庭としても、等く一般婦人を驅つて、社會的職業的活動に従事せしめることとなるであらうと思ふ。況や又々現時男子の出征中、凡そ女子の爲し得る仕事は、何に依らず女子が引き受けて運轉して居る習慣は、戦争終熄と共に全然停止されることなく、必ず其の後まで残存すべきことの明かなるに於てをや。此の如くに見れば、戦後に於ける社會の要求と女子其の人の要求と、又現時の習慣と將來の趨勢と相合して女子奮起の狀勢を激成し、女子の社會的活動の範圍は從來に比し、非常に擴大されて、如何なる事業にも女子の關係し得る限りは關係することとなり、其の活動力も亦曾つて見ざる程の偉大なるものとなるであらうと思はれる。

此の如き婦人の活動範圍の擴大は、必然に又其の準備的教育の要求の擴大となつて現はれるのであるが、とにかく婦人が活動の天地の擴大する結果として直ちに現はれるのは、婦人の人格才能學識のあらゆる發達進歩である。教育の普及昂上は勿論、其の社會的地位の昂上、經濟的勢力の擴張、家庭以外社會的要素としての發達といふことが著しくなる、かくて從來活動範圍の局限されたがために十分に伸展し得なかつた女子の人格

技能は茲に大に伸展を恣にすることを得て、一方には直接に社會を促すと同時に、一方には其の刺戟に依つて男子の進歩を促し、又男子の活動を助け、かくて文明の進歩の上に豫期しなかつた、偉大な新勢力を加へることとなるであらうと思ふ。女子の地位職能の昂上は、其の事だけで既に一つの社會的威力であつて、之と肩を駢べて交際すべき他の國民に對し、非常なる強味を生ずるのである。其の上に、女子の手に依つて社會の機關が運轉され、文明が産出され直接の價値を社會の表面に樹立することになるとすれば、其の國其の社會の品質たる、甚しく優秀なるものとなるべきは明である。戦前に於ける歐米には既に此の事實があつた。戦後に於ける其の傾向のすさまじさは實に思ひやられるのである。

此の如き歐洲婦人の將來に對して本邦の女子のみ獨り舊態を維持し、晏然として長夜の夢を貪つて居て差支がないであらうか。否此の世界の大潮流中に立つ日本の社會は、依然として女子をして其の舊態に晏居せしめる程停滞不振であるものであらうか。此の如くにして日本民族の完全なる發展を各國民族の間に遂げ得るであらうか。吾人は信ず、社會員の半部たる女子を依然たる舊態に抛棄する國民は、到底他との競争に加はる能はざる跛者に外ならざるを。又日本にして若し全く鎖國政策を採

つて歐米と没交渉に別天地を開拓することが出来るとすれば、いざ知らず、既に歐米と親密なる交渉を開き、將來益々親密に交渉せざるべからざる運命にある場合に於て、本邦女子のみが彼と歩調を合せることが出来ず、全く別世界の別生物たるが如き状態にあるとすれば其結果たるや果して如何。種々の世界的共通問題は戦後益々起るであらう。各國婦人の交渉の機會は益々頻繁になるであらう。此の時に當り、我が女子が獨り對等の應酬を爲すことを得ずして、或は流行に附和雷同し、然らざれば全然路上人として傍觀する外に何の能力もないとすれば、我が國民の品格體面、文明の價值程度に疑問を挾まれざるを得ないであらう。従つて信賴尊敬を受けることが出来ないであらう。此の如き場合に於て、國威に影響するところ固より決して少からぬものと思ふ。實に社會に伴はざる女子の停滯は實に國家社會の進歩に影響するのみならず、女子其の人を不幸にし之に伴つて男子の不幸を醸すのである。

我が女子にして、戦後世界の文明發展に應じ、大に進歩し活動するの必要なしとすれば則ち止む、若しその必要ありとすれば、此に相當する準備なかるべからざることは言ふまでもない。準備とは何ぞ、即ち各種の高等なる教育修養である。育兒衛生料理其の他の衣食住に關するのみでも、現在の高等女學校

程度の教育を以つて満足すべからざるは勿論であるが、内は多數女子の指導となり、外は外國婦人と協調して、國威と文明とを進め行くべき女子としては必らずや大學程度迄の教育を要するのである。

但し前述の如く、女子が社會的に地位を進め、活動範圍を廣めることゝなれば、之が爲に種々の弊害を生ずるに至り、却つて社會の進歩を妨げるやうになりはせぬかといふ人があるであらう。吾人もそれは有り得べきことであると思ふ。現今に於ても、その弊害の惡傾向を一面に示して居る點もある。とにかく一利一害は常に事物に伴ふ結果の両面であつて、如何なる事物と雖も、利のみにして害なしといふことはこの社會に存在し得ない。文明教化の顯著なる進歩發展は、其の裏面に幾多の犠牲と罪惡とを潜めて居る事實を何人も否定せぬであらう。女子の進歩といふことでも、亦其の價值の反面に弊害を生ずるのは、當然のことゝ思はなくてはならぬ。併しその弊害ある爲に事物の利用を避け、又文化の發達を阻止することの出来ないと同じく、女子の進歩と雖もたとへ弊害を伴ふにしても、それが爲に之を阻止してその多大なる價值を没了すべきではない。又此は事實上爲し得ることでない。女子の進歩は趨勢である。更にいはゞ人類的要求であり、又民族的必要である。故に弊害を恐れ

て、女子の教育其の他の進歩を阻止するが如き不自然なる倒錯に陥ることなく、却つて益々女子其の人の進歩を完全にすることに依つて、又其の生活條件、社會關係を改善することに依つて、其の弊害不幸を減少する工夫を爲すべきである。此は弊害救済の最大方針であつて又此の外に良法はない。實に女子其の人の進歩發展は社會の進歩、男子の進歩に伴ふ必至的の趨勢であつて、理論上亦爾かあるべき欲求である以上は、之を阻止せずして利導する外に道はないのである。此の必至の道に従ふのが即ち自然なのであり、而して自然は最も健全且つ有効なる方法である。更に言はゞ、最も賢明なる方法なのである。

〔家庭週報〕第四百九十三（四號）大正七年十一月

女子高等教育の必要

女子教育の普及徹底と女子高等教育

近年に於ける女子教育發達の趨勢を見るに、その高等女學校の教育を受けるもの、數は著しい増加を示して居る。其校數は實科を加入すれば四百以上に上らんとして居る。

右の趨勢から推せば、高等女學校生徒數が中學生徒數に比して益に下位に在らざるのみならず、遂に或は之を超越るに至る

べきことを豫言することが出来る。何となれば、中等實業教育機關、技藝教育機關の發達するに従ひ、男子の之に吸収せらるゝものが著しく増加すべきも、女子はそれに伴はずして、普通教育を受けるものが依然として多數を占むべきであるからである。此の如く女子の中等教育が發達する時に於て、果して何時までも高等なる修養教育及び學術教育を要求しないであらうか。現在の如く極めて少數者のみに止まるであらうか。

吾人の見る所に依れば、中等教育の普及するに従ひ、高等なる修養教育と學術教育とを要求する女子の數は著しく増加し來るであらう。中等普通教育に満足せずして、更にそれ以上の修養と研究とを希望する女子の數が著しく増加し來るであらう。中等教育の普及に依つて、一般社會文明の刺戟を感受することの出来るやうになつた女子が増加するに従ひ、その文明を理解し受用せんが爲に、更に高等なる教育を要望する者の多數に在るべきは洵に當然のことである。

教育そのもの、發達の上から見ても、中等程度の教育の十分に發達した後に於ては、更にその上に高等教育の發達のあるべきは當然であつて、その女子に關するが爲に、此の當然の發達を阻止せざるべからざる理由は毫末もないのである。從來に於ては、多數の女子が高等教育に對し熱心なる要求を示さなかつ

たと共に、社會も亦必要ならずとして、寧ろ其の發達を閑却した傾きがあつたのであるが、今後に於ても長く此の傾向を續けざるべからずとするが如きは固より不自然である。且つ又社會運営の上から見て、中等程度の教育を受けたる女子の數の増加するに従ひ、其の上に立つて指導者となるべき女子を要するに至るのは、これ又當然のことであつて、之が爲には勢ひ高等教育の準備を要するのである。現に從來中等程度の學校であつたものが、其の上に次第に二年三年の高等なる教科課程を設置する傾きになつたことを見ても、女子教育の程度昂上の趨勢を窺ふことができる。而して此の趨勢は將來益々發達進歩するものと見るのが當然である。

今日の高等女學校教育は、其人格教育に於ても、賢母良妻教育に於ても、時代遅れて甚だ不徹底である、而して之が改善の根本方法はもう一層女子教育を向上徹底せしめるより他に道はない。

此等の點より觀察して結論すれば、女子の高等教育機關、最高等の修養と研究とを準備する女子大學の要求は、數年ならずして必ず強く起るべしと斷言せざるを得ぬ。

男子の進歩と女子高等教育

男子の活動の裡面には必ず女子の力があつて、隱然之が援助保護に當つてゐるのである。其の女子の人格識量才能の優劣如何は、男子其の人の活動に影響するところ決して少くない。思ふに今後文明の進歩するに従ひ、家庭以外の社會的事業に於て、女子の協力を要することが益々増加するであらう。女子の協力を要する事業事務の範圍の廣まるのみならず、その性質に於て高尚に精微になつてゆくのである。是の如き場合に於て、女子の學識淺く見界狭く、男子の話相手にもならず、唯其の指揮に依つて小間使の役目を務めることができるだけでは、男子の不便の上もないのである。

單に男子の慰藉ではない、社會的には協力者であり、個人的に伴侶朋友でなければならぬ。協力者として略同等の學識才能を要するのは勿論であるが、伴侶朋友としても、亦思想感情を理解し合ふことの出来る修養を要することは敢て説明するまでもない。男子の進歩の此の如く急劇なるの時に當り、女子のみ獨り舊態に止まるは、實に男子の不幸のみではない、女子自身亦之が爲に不幸不快を感じなければならぬ。女子が男子の伴侶朋友として、男子に幸福を與へるのみならず、女子亦之に依つて自ら幸福快樂を得んが爲には、必ずや男子に相等する高き教育に依つて、それだけの資格能力といふものを具備しなければ

ならないのである。今や高等教育を受けつゝある男學生徒數は五六萬に達せる時に於て、大學教育を受くる女子の數の漸々増加するも、之は決して不當のことではない。

女子職業の發達と高等教育

女子が社會に出て活動する傾向は急劇に増加してゐる。此は文明の進歩に伴ふ必至の現象であつて、何者もよく之を沮止することは出来ない。而して女子の社會的活動を促す原因は種々あるが、之を大別して二つの主要なる條件を指摘することが出来る。

その一は社會の發達の結果、その組織は緻密となり、その事務的分化が精微となつて、女子の手を要する範圍が漸次廣まつたことである。教育衛生經濟通信工場等に於て、今日如何に女子の手を必要としてゐるか、これ等に關する諸機關から若し急に女子の手を抜き去るとすれば、縦令全く其の運轉を止るまでに至らないとしても、甚しき澁滞を生ずることは必然である。男子を以て代へることは不可能でないにしても、女子を用ふる方が有利であるとせられる場合が多く、而して女子を有利とする仕事は益々急劇に増加してゐるのである。一定の組織機關の下に備はれて勞作してゐる女子の外、獨立して、若くは私宅に

於て、同様に社會的需用の爲に活動してゐる女子の數も亦固より少數ではない。而して社會は又此等の女子の貢獻に待つところがあるものである。

第二の條件は生存競争の劇烈に赴いて來ることであつて、之が爲に家庭から社會的職業に向つて驅り出される女子の數が次第に増加しつゝあるのである。現今女子にして高等な修養教育を希望する者の數が増加するよりも、職業教育を希望する者の數の著しく増加しつゝある事實は、女子の生活に對する社會的刺戟の性質の何たるかを説明するものと見なければならぬ。此の傾向は將來決して緩和せられざるのみならず、益々甚しかるべきは今茲に斷言を敢てして差支なき事柄であらう。

此の如くにして、現在に於ては十人以上を使用する工場の職工中半數以上は女子であるが、十人以下の工場は又極て多數であつて、而してその職工中女子の割合は大に増加するのである。逓信大藏鐵道院等の女子事務員及醫術開業試験に及第したる女子の數、その他私立會社商店等に勞働してゐる女子の數も決して少くない。

女子の社會的活動、之を狭くしては種々の職業に従事する者が此の如く増加する以上は、兩方面の要求からして、女子高等教育なかるべからざることとなるのである。一は此等多數の職

業に従事する女子の指導者監督保護者となることの出来る修養を具へた女子を要するが故である。女子特有の性質を知り、その生活を解し、思想感情に同情し、衛生生理の事に、教育修養の事に、特殊の利益を計るには、必ず女子其の人の技能を借りなければならぬ部分がある。それ故女子視學官、女子工場監督官、生理衛生委員、學術講演師、説教師等の如き仕事に従事する女子は必然に要求されなければなるまいと思ふ。外國には既に多くの實例があるのである。而して此の如き需用に應ずることの出来る爲には、必ずや高き修養訓練を経たる者でなければならぬ。

第二には女子の社會的活動範圍の擴張されるに従ひ、その程度も勢ひ次第に上昇して、唯職業に従事するが爲にでも、高き教育を要することゝなるのである。今日でも専門學校程度の女教師、又開業免許を受けた女醫等が次第に増加しつつあるのであるが、此の傾向は文明の進歩と共に進歩すべきは固より明かなること、更に多言することを要せぬ。既に外國の最高學位を獲得し、更に本邦の學位を要求せんとする女子もある位で、今後は學者としても最高の研究に従事する女子が輩出し來るべきである。此等の女子の爲に修養機關たり研究機關たるべき最高學府を準備するのは、國家社會として、當然のことではない

であらうか。

前述の如き進歩的時勢の現状であるから、之を狭くしては、女子の職業の品質を高め、之に従事する女子として、人格なき機械的勞働者たらざらしめ、其の正當の發達を保持せしめんが爲に、又之を廣くしては、社會的諸事業に活動する各種各階級の女子をして、流行、虚榮、浮薄、輕佻なる徒事の中に、時間を空費し、或は墮落の因を作るが如き危険を避けて、社會的に又人格的に有効なる活動を爲さしめんが爲に、高き學識品格を修養せしめる用意は今後に於て缺くべからざる政策である。従つて之が機關たる大學教育の道を開くは、女子の爲に、はた社會の爲に將來最も切要事であると信ずる。

國家の發達と女子高等教育

國家の進運は一に其の國民の善良剛健聰明達識に依存することとは今更絮説を要しない事實である。實に之を歴史に見るも、亦之を現在に見るも、國民の人格の優秀といふことは、國家發展の最大資本である。畏きあたりには、夙に教育に御軫念あらせられ、絶えず學事を獎勵あらせられたのは、洵に其の所以があるのである。

然るに、國民の人格の優秀といふことは何に依つて得られる

か。一部少数者のみ、更に言はゞ男子のみが優秀になつたとしても、女子の人格が之に伴はなければ、國民の全體が優秀になつたとはいふことができない。且つ又男と女とに關せず、凡て國民たるものは、一人として女子の身體と精神との影響を受けないものはない。全然外界思想と隔離せられた十個月間の胎内生活はいふに及ばず、爾後の保育教育、家庭に於ける共同生活、執れとして緊密なる關係を女子の身體精神に有せぬものあらう。果して然らば、國民の人格に於ける女子其の人の影響は極て重大なものであつて、殆ど最も主要なる要素と言つても過言ではあるまい。従つて國家的見地に立つて男子の教育を進めると共に、女子の教育をも進め、善良剛健聰明達識の國民を教養するに足るべき母たり妻たる女子を養成することは、缺くべからざる國家的要件とせねばならぬ。

男子の教育が無限に普及する時に當つては、女子の高等教育機關も亦發達せざるべからざるは、實に極て當然の結論である。

米國等に於ける統計に依れば、高等教育を受けたる女子の結婚率及び出産率が、然らざる女子に比して減少する傾きがある。此の傾向のあることからして、高等教育は知識の進歩には効果があるが、女子の生活的素質を劣悪にするものであると論

結して、高等教育に反對するものがある。併し此の統計の結果は職業問題其の他と關聯してゐるのであつて、單純に教育問題としてのみ解決することは不當である。又後段に於て論ずるが如く、歐米の女子高等教育の試みが男子の大學其儘を寫し、然らざれば無條件に男女共學の制を採つた爲に女子の性能發展に注意せざりし結果に歸せねばならぬ。縱令數歩を讓つて、其が教育の結果であると假定しても、極めて少數の優秀女子が己の天職の適性を發揮する爲め、又同時に國家全般の優秀の爲に人格の量を探るべきか、又其の質を探るべきかは、餘程の問題である。結婚率出産率に多少の減少を來たしても、それを償うて遙に餘りある社會的功率を發揮することができるならば、高等教育を受けしむべきはいふまでもない。況や如何に高等教育の自由を許しても、その之を受けるものは、全國民中僅少の部分に止まるに於てをや。女子に高等教育を受けさせること、従つて大學教育の自由を與へることは、決して國家的損耗とはならないと思ふ。

社會の進歩と女子高等教育

社會の進歩を來す大きな要件は二つある。一つは社會を成してゐる各員が活動し進歩することであり、一つは社會の組織が

鞏固にして、其の運用の圓滿なることである。

社會を成してゐる各員の活動進歩が、女子の活動進歩を除外して其の全きを期すべからざること、既に前段國家の見地からした説明に於て、明にされたこと、思ふ。實に現在社會の組成員たる人として、女子の活動進歩は直に社會全體の活動進歩に大關係を有すると同時に、又社會の組成員の生産者保育者教養者として、女子の人格の價値の重大なることを何人も拒み得やう。次に社會組織の鞏固にして圓滿なることを得る爲には、その社會を成す全員の思想感情の間に理解融通を保たなくてはならぬ。然るに同じく社會を組み立て、居るところの男女の間に思想感情の理解融通を保つ爲には、其の思想感情の懸隔が多大であつてはならない。略々相似たる思想感情の間には容易く理解融通が行はれるのであるが、懸隔の餘りに甚しいもの、間には、容易に同情同感が起らない。全員を折半して各々社會の半部を占める男女間に、何の同情同感を保ち得ない社會は、遂に圓滿緊密なる結合を缺き、分裂不具の状態を示さざるを得ないのである。即ち組織の鞏固と運用の圓滿とは到底期し難いのである。

是故に社會をして圓滿完全なる進歩を爲さしめようとするに、女子をして男子と相共に互に理解し同情せしめ、共通に利

害を感じしめ、協同戮力して社會の組織運用の責任を負擔することの出来る資格を具へしめなければならぬ。而して女子をして此の如き資格、此の如き力を具へしめる爲には、必ずそれに相當する教育を與へざるべからざるは固より論を俟たぬことである。男子と全然同一なる教育を受くべしと言ふに非ず、唯同程度の教育を受けることの出来る途を開き、男子が男子としての能力を自由に教養されるやうに、女子も女子としての能力を自由に教養されて、社會員としての貢獻を全くするやうにせしめなければならぬ。

今や社會は益々複雑に精緻に進んでゐるが、その社會に於ける隱然たる融和力となつて、協同一致の團體活動を有効にするものは婦人である。婦人も亦社會の進歩と共に高き教育を受けて、時代を理解し、時代に順應し、女性としての社會的任務を果して行かなければならぬ。之が爲に女子の教育が複雑にして精緻なる大學教育にまで高まるといふことは、固より當然のこととて、歐米先進國の状態を見ても最早此に異議を容るべきではないと思ふ。

戦後に於ける世界の形勢と女子高等教育

大戦争後に於ては、交戦各國は精神的にも經濟上にも非常な

る疲弊を來し、其の創痍の癒えない間は外に向つて活動することとは爲し得ぬであらうと觀察する人もあるのであるが、多分はそれと反對に、非常なる忍苦努力の情勢と、民間に散布せられた資金と、創痍を回復せんとする苦心と、及び對手國に優勢を持たせんとする欲望とは相俟つて、非常に猛烈なる世界的活動を試みるに至るであらう。又若し戦争の爲に大利を博した國があるとすれば、その有り餘る資本力を以て更に世界的の各種事業に活動するであらう。

是故に戦争の爲に或る方面には多大の創痍を残すであらうが、他面に於ては、學術産業政治教育其の他萬般の社會事業に刷新改革を加へ、進歩擴張を見るに至るべきは、恐らく期して俟つことが出来ると思ふ。而して交戦列國は戦後數年は國力充實の爲に全力を擧げて熱狂し、之が手段として海外に發展を競ふであらうし、國力の充實した後も、亦更に海外發展に力を盡すであらう。此の如くにして、戦後に於て、遠からず從來よりも更に猛烈なる平和的競争を惹起するといふことは、國民の豫期して以て準備を十分にせざるべからざるところである。

此の如き狂熱的活動、世界的競争の間に在つては、啻に男子の事業と努力の範圍とを擴大するのみではない、女子も亦近代の傾向を更に大に擴大して、家庭に於ては勿論、家庭以外社會

の各組織機關の間に入りこみ、適當なる仕事を引き受け、重要な働き手として、男子を助け、國家の進歩に多大なる貢獻を加へるであらう。此は女子其の人が周圍の刺戟に感ずる自然の發動に因るのみならず、國家社會は強く之を要望するのである。勿論これとて別に目新しい事ではなくて、唯從來既に爲し來つたことを、戦争の刺戟の爲に著く増大するまでである。

要するに女子の進歩は趨勢である。更に言はゞ人類的要求であり、又民族的必要である。故に弊害を恐れて、女子の教育其の他の進歩を阻止するが如き不自然なる倒錯に陥ることなく、却つて益々女子其の人の進歩を完全にすることに依つて、又其の生活條件、社會關係を改善することに依つて、其の弊害不幸を減少する工夫を爲すべきである。此は弊害救済の最大方針であつて、又此の外に良法はない。實に女子其の人の進歩發達は社會の進歩、男子の進歩に伴ふ必至的の趨勢であつて、理論上亦爾かあるべき欲求である以上は、之を阻止せずして利導する外に道はないのである。此の必至の道に従ふのが即ち自然なのであり、而して自然は最も健全且つ有効なる方法である。更に言はゞ、最も賢明なる方法なのである。

女性研究と女子高等教育

さて茲に最後に残されたる一つの論及は女子としての研究方法である。從來女子の特性特能を無視して、唯共通の人格を涵養すれば足れりとする議論の空疎なるが如く、女子の人格を無視し、機械的に妻母の能力のみを訓練せんとする方針も亦偏僻に過ぎたるものである。子が二十年前女子教育を企つるに當り、人として、婦人として、國民として、三方面より女子を教育せざるべからずとの主張を發表したのであるが、今日に於ても猶此の意見を支持するの必要を見るものである。

從來呼んで人格といひ、はた良妻賢母といふも、空漠たる抽象的概説に止まり、其の内容意義を明確にしなかつたが爲に、實際教育の方針方法亦徹底を缺けるものとなつたのである。同時に又兩者の教育相分離する弊害を誘致したのである。今後は先づ此の問題に科學的研究を加へて、確實なる根據を捉らへ、兩者の密接不離なる關係を有するものなるを明にせざるべからずと思ふ。

抑も人格とは外より附加又は刻畫するを得べきものに非らずして、各自の内部より成長發展し來るものである。即ち生得の稟賦、種族的の遺傳、國民的の遺傳、家系の遺傳、父母よりの遺傳等、各種の遺傳的性能の混合して成れる各自の適性本能が、それ／＼特殊の境遇事情に反應適合せる統一力を指して人

格といふのである。然るに此の中には當然女子特殊の性能も含まれ居るものなるが故に、人格と女性とは、實際に於て各別に存在するのではない。従つて女子の人格教育と女性教育乃至は良妻賢母教育とは密接不離の關係を有すべきもので、決して引き離して各別に行ふべきものではない。若し此の原則に違へば、其の教育は必ず失敗を免れないのである。故に女子教育の適切な方針を得んが爲には、先づ女子の性情を科學的に研究して其の特質を明にし、其の中に人格の萌芽を發見して以て圓滿なる教育を施さなければならぬ。

婦人の人格に留意して、之を尊重し、婦人の幸福と家庭の幸福とを同一視し、又婦人の人格發展と國家の發展との間に密接不離の關係ありとなすに至れるは近代の事に屬するのであつて、東西歴史の記録せる事實は、多く婦人を奴隸として取扱へることを示してゐる。今日に於ても、低級文明國には猶其の遺風を存してゐる。又今回の大戰爭の結果として、婦人も男子に代つて社會の各方面に働く力を有することを明にしたのであるが、併し此は婦人の能力の全部を示したるものに非ず、又其の最善を現はしたるに非ず、唯從來消極に偏したる反面未知數の一部を發露したりといふに止まるのであつて、境遇と事情との如何に依つては、男子の職分を補足するを得ることを教へたま

である。而も此の事實は、婦人と男子との活動性能に差別なきことを證明したのでなくして、却つて婦人の性能が男子と異なる方面に發達するの有理なるを示してゐるのである。是れ今後女子教育は婦人の眞の特質性能を發見して、之を涵養發揮せしむるに在りとする原則に對し、有力なる助言といふべきである。

女子の天性特能を明にして、之が涵養發揮を通じて、其の人格的發達を計るといふのは、從來の良妻賢母主義と實質に於て同一方向に屬するものなれども、併し偏僻せる機械的良妻賢母主義の如く、消極的且つ狹隘なるものではない、又習俗的且つ曖昧なるものではない。更に廣き見地に立つて、而も精確なる科學的研究を要求するのである。殊に從來本邦婦人の多數が全然男子に隸屬して寄生々活を營みたる結果、遊惰安逸を以て本分となし、勞働力作せざるを以て上品高尚と心得たる弊習を根本より打破し、人生勞作せずして生くるの道なく、其の方面と様式とは男子と異なるも、等しく勞働力作して、以て其の特殊の使命天職を行ふべきを教へなければならぬ。

要するに、女子は決して男子と同じからず、而も男子に劣るものに非ず、又女子が覺醒して男子の隸屬を脱するは、必ずしも男子と競争を開始するの謂ひに非ず、男子の領分に侵入する

を意味せず、女子が其の職分を積極的に盡すとは、男子の完全を期するに非ず、男子の修養の道程に追隨せんとするに非ず。女子の特殊の性能素質に基きて、女性としての完全を期し、適材を以て適處に就いて、社會に於て男子の爲し得ざる一方面を引き受け、自性の自覺と、男子に對する理解とを以て、更に緊密に男子と協力するを期するのである。即ち進歩の要件たる分化と統一とを、更に緊密に且つ確實に男女間に行はしめんとするのである。

十九世紀は科學の世紀にして、同時に男子の世紀であつた。男子の手に依る科學の進歩は實に目ざましく、文明と共に女子の世界も著しく開拓せられたのであるが、其の反面に大缺陷を残したのである。即ち人類が本能的に追求する精神界の生活を蔑視するに至り、之に對する無能力を示したのである。吾人の生活界には無形の世界と有形の世界、潜在の世界と顯在の世界がある。十九世紀の科學的男子文明は遂に此の無形の靈界を開拓し得ず、其の弊害の積重するところ、遂に今次の大戦の如き大破綻を來したのである。此の残されたる世界を開拓して、其の精神文明を作り出すことは婦人の特能に俟つの外はない。女子の性能は直觀的、演繹的、感情的、應用的、實行的、宗教的、神秘的にして、潜在無形の精神界に脚を投じ、之を闡明し來る資

格を具有せるが故に、此の特長を涵養して、十分に其の能力を發揮せしむれば、以て從來文明の缺陷を補ひ、完美なる文明を將來に産出し、社會國家家庭及び男子の慶福を増進すべきを疑はない。而して之が爲には、從來の曖昧なる常識的見解に甘んぜず、最も嚴密精確なる女性研究を必要とするのである。

されば、女子高等教育の發達は社會各方面の要求であり、又文明必然の趨勢である。今後に於て社會の上級に立つべき婦人は、徒に階級や財産の機械的威力を借りて、其の體面を裝ふものでなくして、其の人格識見能力に於て、他を指導するに足る實質を具へるものでなくてはならぬ。此の如き女子の多數ある程其の社會の進歩は健全にして、且つ顯著迅速なのである。今後優秀なる歐米各國民の間に立つて、大和民族の榮光を恣にする事の出来る一大要件は、實に女子教育の進歩向上にある事、此れ決して疑ふべからざる斷案である。而して才能ある女子をして、どこまでも其の才能を發揮せしめる事は、社會の爲に最も必要なるのみならず、女子の人格的要求である。此の女子の才能と要求とを埋没枯死せしめずして十分に發達せしめる爲には、各種の専門教育機關を設備する必要がある。是れ女子を有する國家社會の義務である。

男子は又自己を進め、自己の經營する社會を進めんが爲に

は、女子をして出来るだけ高き修養を爲さしめる道を開き、之が爲に援助を與ふる義務がある。如何なる男子と雖も、母たる女子を有せざるものなく、妻たる女子を有せざるものがない。女子の修養を高め、その進歩發展の機會を與ふることは、其の母たる女子に對する男子の義務である。賢良なる母を有せんと欲する男子は必ず女子の高等教育を援助しなくてはならぬ。同様に貞淑なる夫人を有せんと欲する男子は必ず女子の高等教育を奨勵しなくてはならぬ。其の子女を完全に教育せんと欲する男子は必ず女子の高等教育に賛成しなくてはならぬ。何者か女子に對して俟つあるところの男子が、女子をしてなるべく高き修養を積む機會を得しめんとするに何の不思議もある筈はない。

既に女子をしてなるべく高き修養を得しめることの必要なる以上は、其の種類程度をなるべく狭く低く限らんとするが如きは矛盾である。必ずしも男子と同一なるを要せぬが、併し女子に適當なる方式に於て、男子と同等なる教育の實質を與ふべきは當然である。更に言はゞ、女子として、男子教育と同價値のところまで進み得る道を開き與へるのが當然である。而して其の或る部分に於ては男子教育に交錯し、共同し、全く同じ教育を受ける機會も亦勿論あるべきである。此の如くにして女子の爲に各種専門教育の機關を設け、更に大學教育を授ける道を制

度上に開くことは、實に避くべからざる國家の要件と斷言せざる得ぬ。

〔婦人問題〕 第壹卷第貳號） 大正七年十一月

光輝ある婦人の使命

前後五年間、世界が戰爭に集注したことは、有史以來未曾有のことである。さうして此の戰爭中又更に未曾有なことは、婦人が其の精神を發揮して、男子に劣らぬ活動をしたといふことである。此の状態は休戦の今日否戦後の將來に於てはどうなつて行くものであらうか。戦後の大問題はこれである。

戦後に於ける問題はいま誰も屢々繰返して言つてゐるやうに、歐米に於ては既に戦前に於てすら女の数が五六百萬も過剰してゐる。然るに今度の戰爭で戦死した男子は千萬人を算してゐる。其の上に負傷して廢人となつた者を加へると三千萬以上にもなるといふ事である。つまり生きてゐても仕事の出来ない状態で生活する男子の数は少くとも二千萬を出るとも下ることはない。即ち女の数はまたそれだけ過剰したわけで、而もそれ等は皆有爲な青年であつて見れば、女も亦有爲な青年女子がそ

の配偶たるべき男子を失つたわけである。故に今後更に今迄既に過剰して居つた婦人が——益々獨身生活を送らねばならぬ状態にある婦人が——増加して來るといふことは事實である。此の不自然な生活をするといふことが、婦人の心理状態に果してどう影響して來るであらうか、これが問題である。

之に就いて斷定を下す人々の多くは「それは、婦人が益々神經質になりはしないか、さうして所謂ヒステリー病の婦人が増加することを免れないであらう」といつてゐる。もう一つは、性的道德即ち貞操問題といふものが墮落しはしないか、といふことを心配してゐる。現に獨逸あたりでは國家が指導して戦後の人口政策を企てるやうな傾向が表れて居るといふことが傳へられてゐるが、これは獨逸ばかりでなく、戦後に於ける一般の傾向とすると、今後一層男女の道德といふものは腐敗して行きはしないであらうか。

尙もう一つの問題は、婦人の職業問題である。言ふまでもなく、男子の半數といはず殆んど全部が戰爭に出でしまつた。其の後は皆婦人の手によつて行はれてゐるやうな次第で、之が今戰爭が止んだからとて直ちに復舊状態になるものではない。同時に待遇とても俄に従前の如く女子が不利益な立場になるといふやうなこともあるまいといふこと、即ち戰爭は終熄しても、

戦争によつて發揮して來た婦人の活動は俄に止んで、その職業を失ふといふやうなことはあるまい。さうなつて來ると男子は今迄のやうに其の職業を獨占し、又その満足な報酬を獨占することが困難になつて來る、爲に一層男女の不調和を來しはしないかといふこと、これ又一問題である。

斯くの如くにして女子の位置が高まり、斯くの如くにして獨立して來る女子が自然に殖えて來ると、今迄のやうに男子は男子に適當な職業に就き、女子は女子の性情に適した職業に就くといふことは自然不可能になつて來るわけである。その結果はどうなつて來るかといふと、女子は自然に男性化して來る、而も神經質な男性化である。詰り此の變化によつて女徳といふものが惡化して來はしないであらうか。

二

以上は皆戦後の婦人問題を悲觀的に考へる人々の假定である。けれども私は考へる。若しこれが戦前のやうに、物質萬能の大勢であり、利己的個人主義が優勢を占めてゐる時勢、即ち物質的利害といふことが人間の活動の動機であり、國家の原動力であるならば、以上の假定は遺憾ながら一々適中するであらうといはなければならぬ。けれども私の見る所は幸に此の悲

觀的假定を否定し得るに足るだけの事實を捉へてある。

今度の戦争といふものは丁度人間が大病に罹つたやうなものである。最も激しいチブス病に冒されたやうに、所謂結締組織が分離してその生命を危くするやうに、各々の國體は分解し、各機關は破壊されて殆んど人類の運命を危くし、數千萬年建設した文明も殆んど破壊されやうといふ危機に沈んだのであるから、其の今迄物質に酔うた者も眼を醒まし、我が儘横暴を極めた者も始めて其の罪惡を自覺して來て、所謂蘇生の機を與へられたやうなものである。敵も味方も今迄の非を悟つたわけである。今度の戦争は今迄の戦争のやうに單に國と國と、領地と領地との戦争ではない——勿論最初の動機は此の限りではないかもしれないが——人間の罪惡と正義との戦である。權力意志と道徳意志との戦であるから、此の戦争によつて人々は、人間の個人主義といはうか利己的動機といはうか、つまりさういふ卑劣な動機から生れる行爲が如何に無價値に終るかを明らかに悟つたわけである。恰も人間が非常に困難に遭つて眼を醒ますやうに、今度の非常な行き詰りに遭つて、所謂骨身にしみて其の非を悔いたのである。三千八百萬人の死傷者を出したといふことも單にそれだけの死傷者と見ることは出來ない。たとひ戦場で死傷せずとも、其の蔭には或は此の戦争の爲に餓えて死ぬ者も

あつたらうし、或は最愛な夫を失ひ、最愛なる子に別れ、親を失ひ、兄弟を失つて實に眼も當てられぬ悲惨事が幾何あつたとかわからぬ程である。而も此の犠牲を拂つても尙代へ難い目的に到達せねば止まぬ或ものがあつた。それは物質的報酬ではなく、精神的革命！ それである。一言でいへばどうしても物質ばかりではないといふことを悟つて精神に蘇生して來るその爲の犠牲であるのである。正義の勝利といふことも其所にあるのである。これを一個人の上にいへば、蘇生、世界が精神的方面に復活して來たのである。尙言ひ換ふれば精神が物質に勝つたのである。

此の戰の犠牲となつて死んだ者は、所謂肉體的、物質的にこそ失つたものであるが、其の精神は残つた者のどこかに生きてゐる。況んや共に戰つた兵士は勿論、其の主義を共にして、此の戰に参加した國民にはともかくもこの犠牲者の魂を受けて居る筈である。さうして、人生はどうしても此の精神が根本でなくてはならぬといふことを悟つたわけである。

故に戰爭の表面的、一時的の結果に悲觀する——如上の、女子が其の配偶者を失つて益々神經的になるとか、或はその境遇の悪影響を受けて益々惡傾向に陥るとか——といふやうな、今迄の人間の缺點を助長して、言ひ換ふれば、今迄の物質偏重の

失敗に懲りずして、尙も亦男女相争ひ相闘いで再び人間をして物質に墮落せしむることはあるまいと私は信ずる。否其所に人間が大いに眼醒めて新しい勇氣を以て人間の善意志に協同し、目的の爲に相協同するといふことが出来るであらうと私は信じてゐる。

十九世紀の文明は物質的といふことより脱することが出来なかつた。けれども今度はその皮相の文明に行きつまつて茲に新たななる精神世界を見出して來たのである。其の世界は文明の世界である。今度の戰爭によつてその文明世界の曙光を更に近く迎へることが出来るやうになつたといふことは事實である。

三

そこで私は、婦人は此の機會に於て、大いに其の使命を感じ、人間の價値を自覺して來るであらうと思ふ。又さうなければならぬ筈であると思ふ。今迄物質的に弱き者、小さき者と見なされて居つたものもその精神に於て正しきに生きて居つたものは今度の戰に皆勝つてゐるのである。「精神に於て正しきものは遂に勝つ」といふことは今度の戰爭のすべての犠牲を以て證明されてゐる。さうして婦人が若しその使命を感じ、その價値を自覺したならば、此の戰爭は寧ろ婦人をして其の力を發揮

せしむる爲の無上の好機會となるものであらうと思ふ。

比較的に分解的、歸納的、職業的である男子は十九世紀の物質文明に於けるすべての機會を獨占してゐた。けれども今後の世紀、精神世界の文明の機會は女子の特性によつて拓かるゝを俟つものゝやうである。即ちその比較的に直觀的であることによつて、即ち愛、同情、調和、完全、統一、美といふやうな女子の特性は精神的世界を建設するに最も必要なる要素となるべきものである。

従前とでも、女子の此の特性に變りはなかつた。けれどもこの特性を發揮せしむべき機會が與へられなかつたのである。那翁が言つたやうに「人間は例へば數字のやうなものである」其の置き場所によつて、或は高い數ともなり、或は最低位ともなるやうに、人間も其の地位境遇に依つて其の活らきを發揮する場合と然らざる場合とがある。今迄はいはゞ男子が其の最高の地位機會を特占して居つたのであるが、今度は女子に其の適所を譲つたのである。女子が其の地位にあつて、其の使命を感じれば、其所に始めて其の天分を發揮し、其の眞價を表すことが出来る。此の意味に於て、二十世紀は女の世紀である。といふことが出来る。つまり今度の戦争が益々さうして來たのである。されば婦人の將來は悲觀するところではない。否此所に自

覺すれば益々光輝ある世界が開かれて行くのである。私は此の假説を以て今後の婦人問題を見て行きたいと思ふ。

〔婦人問題〕第二卷第一號 大正八年一月

世界維新

平和に明くる大正八年の世界に於ける新傾向

新世界の目標

一九一四年から一九一八年に互つた世界史上空前の大戦争は、これをこの戦争の主義精神から見れば、所謂權力意志と道徳意志とが世界の支配權を争つた世界的大運動といはなければなりません。さうしてこの大運動は遂に聯合軍が標榜して立つた道徳意志の勝利となつたのであります。さしも横暴を極めた獨逸の權力主義も遂に自ら敗れて今後の新しき世界、新しき國民生活は道徳主義に基く各國民の自由と國際の正義とを各國共通の下に實行し得る時代となつたのであります。過去の暗澹沈淪の世界に代つて平和光明の世界が今生れやうとして居るこの曙光を誰か歡ばぬものがありませうか。この喜悅を誰か感謝せぬものがありませうか。

獨逸は殊に幾十年來の準備を以てその横暴を逞しうせんとし

たのであります。爲にこの戦争は終りまで非常な勢力の集注を要したのであります。かくこの戦争が容易ならぬものであつたと同時に、勃發當時は殊にその去就に苦しみ、その態度を決しかねるものも少くなかつたのであります。甚しきは聯合軍に參加しながら、果してこの戦争が正義の勝利を見得べきか否かも信じ得ぬ迄に横暴なる獨逸の權力に威服して居つたものさへあつたことは否定出来ぬ事實でありました。然るに正義は遂に勝つた。横暴な獨逸も、如何に強い權力も、正義の力には遂に降伏するの止むを得ない事實となりました。この權力を挫いた力、それは矢張り力ではあつても、この力を導くものは道德意志即ちそこに一つの神祕の力があるからであります。またこの力は、例へば人格の發揮が健全なる肉體に依つて初めて完全にその實際生活を遂げ得るやうに、道德意志の實現の爲の力、正義の理想を實行する爲の力であります。

私はこの戦捷に當つて殊に感謝措くを得ざる所のは、この大動亂に際し、而も未だ種々なる批難壓迫を免れないその勃發當時から幸にこの正義の神祕に導かれ、これに感應しこれに共鳴して我等の態度を明らかにし得たことであります。我等は極めて微力ながらこの動機に奮起して常に正義を表象した聯合軍の一員となつて、眼に見えぬ戦ひを續けて未だ一度も躊躇

することなく、未だ一度も逡巡することなく、善き戦を戦ひ續けたことであります。さうして今この戦捷に遭遇しその目的たる永久平和の曙光をこの年の始めに見ることは何たる喜びでありませう。

聯合軍の目的は永久平和に在る、人道主義の主張、國際道德の確立、國際同盟、これ等はこの戦捷によつて着手せらるべき今後の實行問題であります。

從來も國々には憲法といふものがありました。けれどもその國と國との間には憲法が成立つて居なかつたのであります。——強い者は弱い者を統御する——さういふ權力主義を敢へて跋扈せしめるほど從來の平和運動は無効であつたのであります。併し今度の人類的慘禍に對して覺醒した世界的良心は今後の世界に如何なる解決を與へようとして居るか、今後のこの活動は如何なる方面に發展しようとして居るか、及びこの事實が如何に各國民に影響しつゝあるかといふことは興味ある、又最も考慮を要する問題であります。

全世界の傾向

斯くの如く世界はこの大戦の教訓に依り、漸く從來の單純なる國家的利己主義から醒めて、國際的公義に奮起し、その國民

的活動を力ある道徳主義の實現に努力しようとして居るのであります。即ち全世界が正しき意味の民本主義實行の傾向を表して來たのであります。この場合我が國も亦この風潮の如何なる影響を受けつゝあるかについて考へて見なければなりません。否これは大問題であります。我が國體とこのデモクラシーとは果して調和し得るものでありませうか、若しもこの主義とわが帝國の主義と矛盾するものであつたならば、それこそは非常な問題であります。何となればこの問題を解決せずして私共は世界の正義に共鳴し、これに感謝することは出来ない筈であります。ましてこの世界の大勢に乘じ、この未曾有の世界の大轉回期に於て、よくその世界的國家、又國民としての新面目を持し得らるべきでせうか。

まことに今日は世界史上未曾有の大時期であります。世界的維新の大轉回期であります。と同時に我が帝國にとつては——明治維新後の最大時機——將さに第二の維新を完成しなければならぬ時であります。さうしてこの大事業はよくこの大時機の理想主潮を理解し、此の世界大轉回期の樞軸を把握するに非ざればこの目的は達し得られないのであります。私共は今この世界の主張を取つて一考する時、其處に我が國是と彼の民本主義、根本主義（後段々詳論す）とは矛盾すべきものゝあること

を見出さないのであります。更にいへば、之即ち我が明治維新の大理想を徹底し成就することになるのであります。されば我が帝國は、今日世界の大時機に際して施すべき大主義大國是を夙に我が明治第一維新に於て確立して居たわけであります。然らばこの明治の第一維新と、今日の世界維新が如何なる關係に在るかに就いて私は私の確信するところを披瀝して見ませう。

永遠不朽の國是

明治維新の目標は王政復古とか、開國進取とかいふ旗章が種々ありましたが、其等が統一せられて五ヶ條の御誓文と成つて顯れたのであります。而して今日の國是となるべき目標も矢張り其所に源を發して居らなければならぬと思ひます。否寧ろ五ヶ條の御誓文は、わが建國以來の精神を探り、世界文明の原義に照らして、その根本を五事に約して以て畏くも天地神明の前に捧げ宣せられた聖訓でありますから、これぞ洵に永遠不朽の國是であつて、即ち明治の隆運を發揮せられたる原典であります。されば國是の精神、政教の大綱としては固より必ずこれに由らなければなりません。同時に又その施行運用の實際に當つては時勢に應じ切に改善を加へ、大いに擴充を計り効を新たにし、果を倍にし、進んで帝國の使命を世界に布くの道を講

じなくてはなりません。此の目標に誰か集らざるものあらんや、此の主義に誰か不平を懐くものあらんやであります。今之を具體的に申して見ますと、此の御誓文の第一要義は、民意を重んじて政治を行はせ給ふ聖旨であつて、今日の所謂政治的及び教育的舉國一致を意味するものであります。即ち萬機を公論に決し、苟も私我の偏見を以て天下の大政を輕斷すべからざるは、之御誓文の首項でありまして、而して實に立憲政體の本義であります。今後も益々此の趣旨の徹底を力めなくてはなりません。明治初年に於ける公論とは、即ち各藩を合せて平等に進言建策すべきを指したものでありますが、今後に於ては上下一致、男女共同、社會民衆一人も與らざるなきを要するので、即ち庶民に至るまで各々其の志を遂げ、人心をして倦まざらしむるの實は此處に存します。これ國民元氣の振作の要諦であると思ふのであります。故に國力を充實せしめんとすれば、必ずや民衆をして一人も残らず悉く皆其の志を遂げしめ、而して其の精神と能力とを集めて、之を一に合はせなくてはなりません。若し一人と雖も之を失はゞ、壹にそれだけ國力の削減となるのみならず、列聖の仁慈に戻り先帝の遺詔に背き、而して且生民子女愛の君徳に悖る事になるのであります。

第二要義は眞理研究及び信仰の自由といふ點にあらうと思ひ

ます。即ち知識を世界に求めて皇基を振起する方法は從來最も努め來た所で、今後と雖も更に益々努力せざるべからざる緊切事であります。

明治初年に於ては鎖國孤立の舊慣を去り、歐米の文物を輸入して以て我が短を補ふを主としたのであります。爾來時勢は頻りに變り、今日に至つては勿論此の消極受動の態度に止まるを許さず、今後益々獨創的に事物の眞理に到達せざれば止まない態度を以て、進んで歐米列國と相提携して廣く世界に活動し、我が固有の文化を發揮し、以て他の進歩を助くる積極自動の態度に出ることを要することになつて來ました。知識を世界に求むるは勿論、皇基の振起を世界的活動に期する用意は今後益々切要であります。

第三の要義は道德を重んじ、正義人道の精神を以て吾が帝國の大使命を履行するにありと思ふ。戊申詔書に

「朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ、東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス、朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ頼ランコトヲ期ス……」と。

殊に列國今後の活動を豫測し、而して東洋現在の状態を觀察する時は、此の間に處する帝國の地位たる頗る重大なるものがあるのであります。諸多の政治的經濟的強大勢力の競争紛糾す

ること益々劇甚を加ふべき東洋將來の天地が、其の動搖の爲に攪亂壓倒せられずして、進んで獨立發達を全うすることは當に帝國の爲に甚だ緊要であるのみならず、又隣邦の爲に緊要なることでもあります。東洋平和の守護者を以て任ずる帝國は、之に對して益々細心努力を加ふる處なきを得ないのであります。東洋民族を發達せしめ、其の古來の文物教化を闡明して、之と西洋文明とを融和せしめる如きは、世界人類の進歩の爲に効果ある一大事業にして、その責務は繫つて帝國民の雙肩に在るのであります。

帝國と共に太平洋を圍み、東西に相對する兩大隣邦は現在最も密接なる政治的經濟的關係を帝國との間に結んで居るのであります。此の關係の今後益々深厚に赴く可きは言を俟たぬのであります。互に和衷協同愈々平和の親交を重ね、交々相裨益する方法を盡すことは帝國の爲に有利なるのみならず、東洋の發達の爲に切要なる方法であります。

惟ふに優秀なる民族の品格に依りて、平和の間に發展の地歩を占むるは、如何なる民族も共に守らざるべからざる人類の徳義であつて、干戈を以て相撃ち、他を壓倒して獨自の私利を占むるが如きは、當に以て帝國將來の方針と共に爲す可らざるのみならず、必ず打破するを要する舊世界の陋習であります。洵

に高く天地の公道に基きて汎く東西の文明を合せ、一大平和の世界に於て萬邦共に等しく其の樂みを享くるは、之天下の擧げて希望する所にして、而して帝國の夙に採つて以て國是とする所ではありますまいか。

公道に由る所、世界に敵無し、萬邦皆友邦、唯此の公道に反し平和を攪亂するものは凡そ國の何たるを問はず常に我が敵であります。

以上は明治維新の趣旨を完成し、建國の精神を貫徹する所以の今後の大方針にして、國民全體の嚮ふ所の目標とすべき要諦であらうかと考へるのであります。而して此の大理想、大國是は教育勅語に「之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、中外ニ施シテ悖ラズ」とありますやうに、此の御趣旨は世界の大勢と一致するものであります。世界戰亂の背後に流れて居る精神界の大潮流も融和するものであります。彼の聯合軍の目標として、高く掲げて居る所のデモクラシーの根本精神も亦此の邊にあるものと考へるのであります。併し吾々は何も強ひて歐米の思潮に一致せしめんと力めるものではありません。若し彼等の主義が天地の公道に背くものであり、我が國體の精華に悖るものであるならば、吾人は斷乎として之に反對し、たとへ孤獨の地位に立つも、或は世界を敵とせざる可からざるに至るも敢へて辭するも

のではありません。けれども互に相一致協力することの出来る共通の精神の存在するにも拘はらず、盲目的主義的に強ひて異をたて、揣摩臆断を以て他を排斥し、以て無用の紛争を醸すが如きは最も戒めざる可からざるところであります。されば此の際速に世界の大勢のある所を洞察し、主義精神の潜む所を闡明して國民の態度を一にし、我が國是を内外に明らかならしむることは焦眉の急務であると信ずるのであります。

忠孝の眞髓とデモクラシー

然るに我が國の忠孝の眞髓が外國人に分り兼ねる様に、彼等の信条として居る民本主義の眞相は、亦吾々には分り兼ねる事が多い様であります。吾々之に就いては可成く卒直に彼等の語るところを聴取し、虚心以て其の眞意を汲みとるに力めることが必要であらうかと考へるのであります。

故に私は此の頃頻りに出版される此の主義に就いての書籍及び雑誌に顯れる所説中、その代表的思想により現代に適用されて居る意義を綜合して、歐米の學者、政治家等が自らどう信じて居るかを見、又其の主義信仰を國際關係に實現せんとして居る方策即ち國際聯盟等の如きもの、骨子と成るべき要點を抽出して、我が國是が彼等の目標と一致するや、或は衝突するや其

の事實を明らかにして見る必要があると思ふのであります。

其の代表的思想の言表によりますと、此のデモクラシーといふのは單に政體にあらず、制度にあらずして、是は信仰である、生活の精神である、主義理想であるというて居るのであります。

其の本旨は相互主義である。共同和衷の精神であつて互に他人の利益を顧慮する精神、他人の意見を互に尊重する精神である。單り政治に於てのみならず、宗教に於ても産業に於ても教育制度に於ても相互尊重、相互扶助、相互親善の精神を理想目的として居るのであります。さうして此の頃益々明らかに成つて來ました事柄は民主主義は政體にあらず、聯合軍が戦ふ動機は如何なる政體たりと雖も其の政體擁護の爲に戦ふのではない、此の主義は政體以上のものであるといふのであります。其の例證として擧げてある所を見るに、

「佛蘭西は共和國であり、伊太利は君主國であるが、兩者何れも民本主義である。亞米利加は共和國であり、英國は君主國であるが、實際は英國の方が米國よりも民本的である」といつて居るのであります。

然らば彼等の謂ふ民本主義は如何なる要素を持つて居る乎、其の眞髓は如何なるものであるかを尋ねて見ますと、

第一の要素は信教の自由、國民各自の信念涵養に重きを置く主義で、即ち各自が絶對に對する直接の態度を認め、又其の態度行爲に對する相互の寛容なる態度を重んずるのであります。

現代に於ける歐米人の宗教に對する態度即ち絶對に對する態度につき次ぎの如く言つて居るものが多いのであるが、此の言葉はよく今日の歐米の宗教界の傾向を語つて居ると思ふから引照致しますが、それは、

「神と自分との間に牧師とか、教會とか、經典とか聖書とかいふ様な中間物を置かない、是等は神を見出す助けとは成らうが、是等をして神の地位に代らしめては成らぬ。神は我等と直接交通の出来るもので、神は常に人間を離れぬ偉大なる人間の伴侶である」と、此の信念が彼等の民本主義であるとして居るのである。

第二の要素は産業の好意的協同の意味である。贅澤なる富者の惡弊と下劣なる貧者の惡弊との原因を除くために、富の分配を更に優良なる状態に改善進歩せしむる事に依りて社會を救済せんとすることが民本主義の努力のある處であるとして居ります。此の主義は單に人々に其の權利を獲得せしむるに止まらず、凡ての人々に其の義務を遂行せしむるやうに努力するのである。少くとも自分が社會から受くる所のものに相應するだけ

は社會に貢獻するのが凡ての人々の義務である。吾人は裸で此の世に生れ來た以上何物かを所有せん爲には、吾々は之を產出するか、贈物として他から貰ふ乎、盜む乎、共有の倉庫から得る乎しなければならぬ。そこで手か腦か感情の力かに依つて即ち言論の力により、或は勞働によりて其の應分の貢獻を社會に致し、以て始めて社會から受けることにならねばならぬ。此の貢獻をすることはあらゆる人間の義務である。而して斯かる貢獻を爲すべき公平なる機會を得ることはあらゆる人々の權利であるといふのであります。此の主義は彼の二宮尊徳の所謂働き主義、助け主義と其の眞髓は全く同一であります。

教育に對する主義

第三の要素とすべき點は教育を受くる義務を凡ての人に負はせ、教育を受くる機會を要求する權利を凡ての人々に與へんとする努力である。即ち庶民に至るまで各々其の志を遂げしむる御趣意と異なる處はないやうであります。即ち男女とも社會國家の一員として出来るだけの自分を向上發展せしめ、又其の子供を國家の子供として最も善き者に育て上げるの義務を兩親に負はしめようと主張するのであります。

故に學校は鑄造所であつてはならぬ。學校の眞目的は凡ての

生徒に成長の機會を與へねばならぬ。故に學校は農園であらねばならぬ。今や教育に選擇制度が認められ、學術的教育に實業的訓練が附加せられ、新たに女に教育が興されるに至つた。

教育の機會を得るを喜ぶはあらゆる人間の權利である。又此の機會を各人種々なる要求に應じて與へるために、多種多様ならしむることは社會の義務である。而して自分を成べく完成せしむるために其の機會を利用することは各個人の義務であるとするのが、デモクラシーの教育に對する主義であります。

第四の要素は政治的調和統一の基礎を自制力に、克己力に求むる主義であります。即ち自治自制は凡ての人々の權利であると同時に義務であるとするのである。而して教育の目的は己の義務を實行せしむる人間、又自發的遵奉心ある人間を養成するにある。而して人各々己の運命を決するは己の權利であると同時に義務であるとするのであります。例へば凡ての人は己の目で見、己の手で働き、己の頭腦で考へねばならぬ様に、己の判斷に因つて己を導き、己の良心に因つて己を統治せねばならぬと主張するのであります。

つまり此の主義は國際的には萬邦和衷協同の主義であり、個人と個人と又團體と團體との關係に於ては相互主義で、勸語にある忠孝、友誼、和信、博愛の徳と一致するので、政治に於て

は御誓文に明らかなる如く、萬機公論に決し、庶民に至るまで其の志を遂げしめるといふ御趣旨と同意義であらうと思ふ。又國際關係に於ては東西相倚り彼此相濟し、以て其の福利を共にすと宣し給へる戊申詔書の御趣旨を同じうするものであるやうに思ふ。

前述の如く我が帝國は世界の思潮に響應して今日の大時機に施すべき大主義大國是を既に夙に有して居るわけであります。我が武士道至高の精神は大義名分の爲に私情を抱つて起つことに存するのであります。而して維新の根本主義を實現すること、之直ちに世界に對して大義名分を唱へることであつて、而も同時に世界の潮流に乗ずる所以であると確信するのであります。

されば斯くの如く國民精神の結晶たる大理想を既に所持してゐる我々は、固より總て此の理想に向つて献身努力しなければならぬ。而して此の理想は偶然にも世界目下の最高理想、最新の思想と共通の内容を持つてゐるのでありますから、我々は何の顧慮するところなく、此の理想に向つて奮進しきへすれば、内外に向つて一舉兩得の効果を奏することが出来るのであります。故に此の世界の大轉回期に對應するに當つて、茲に吾人は天意人道に隨順し、正大なる公義を執り、舉國一致、萬邦協

同、人類歸一の目標を高く掲げ、國民の向ふ所、民心の赴く所を示さなくてはなりません。消極的の細項に重なるよりも、先づ積極的の目標を示して是に集注せしめるやうに力めることが、凡ての弊害を一掃し、凡ての衝突を調和し、凡ての煩悶不平を癒し、凡ての倦怠情氣を振作する第一の要諦ではないかと考へるのであります。

終りに臨んで斯くの如き重大なる議案を取扱ふ處の我々の態度は如何にあるべきかに就き一言附加したいと思ふのであります。私の平生信ずる處に依れば、凡て道德的改善は實行に始まるのである。而して實行は自ら氣のついた者、自ら覺れる者が先づ其の自省、自覺せる所を實行するに始まるのである。改善の高唱は即ち自己が實行の宣言である、誓約である、と見なければなりません。此の意味に於て提言、決議は重大なる責任を自ら負擔するものであります。此の責任の自覺が即ち道德的中心の始めであつて、即ち道德の始めであり、改善の始めであります。これ迄道德の聲のみ高くして道德普及の實の擧がらなかつたのは、實に之を唱へる者自ら、先づ之を實行して然る後他に及ぼすの必然の順序を取らずして、他をして先づ之を實行せしめんとした事に存する。更に他を批難し戒飾するのみに止めて置いたことに存すると思はれるのであります。互に責め合

ひ、互に他の缺點を教へ合ふのみでは何時までたつても道德の興る道はない。唯議論が繼續するのみであります。故に此の如き決議をするに當つてはその實効を擧げる爲に、弊害の原因、匡救の方法に就いて十分なる研究を爲すと同時に、我々各自の責任に就いて十分の覺悟を以て起たなければならぬと竊に考へる次第であります。

（「家庭週報」第四百九十八號、第五百一號）

我が繼承者に告ぐ

まことに御面倒をかけまして且御心配をかけましてすみませんが、本校の將來に就きまして重要な事柄を一言あなた方に訴へて置きたいと思ふ、ではない——これが私の義務であると感じまして良心の命令に従つて最初に先づ私の病狀につき、且後事を依囑するに就いての用意が出来ましたらもう一度——ではない、これから機會さへあれば何度でも——お目にかゝつて直接諸子に申して置きたいと思ふことがあります。それについて澁澤男爵、大隈侯爵、皆さん非常に御壯健であります、皆私より御老體のお方々が非常に私の此の身體で此所に立つことを御心配下さつたのであります、高木博士、二木博士及び大學

病院分院の醫局長矢田醫學士等が「けふは我々が附いて居つてやるから」というて下さつて、皆さんも先づ御安心下さつてお許しが出た譯であります。斯うして皆さんがいろいろ御盡力下さつたお蔭で、私の病氣がその後進まずして今日こゝに出ることが出来ましたのは深く感謝するのであります。この外にまだ御禮を述べねばならぬことはいろいろありますが、それ等は今は省いて出来る丈け大事なことだけ申さうと思ふのであります。で極平氣に又平日と少しも違はないやうに、且成可く談話體にボツリボツリとお話をします——それでいくらか時間がかゝりますが、その代り私の身體には少しも障らずにお話をいたすことが出来ます。

第一に私がこの病氣にかゝつた事を自分で知りましたのは、昨年九月の頃でありましたが、なぜこれをあなた方に、否あなた方から看破される迄告げなかつたか、又その後もこれを發表せぬといふのはどういふ理由であるか、且只今の私の生理狀態並びに心理狀態は如何なるものであるか、諸子の聞かんと欲する所でありませうから、今それを簡單に私から話します。

次に、本校の將來について大切なことを申さうと思ひます。

私が昨年チブスになりまして、豫後は大變に良好であります

て、一ヶ月に三貫目も體重が増えたのであります。さうしてその間にいろいろ新しい經驗を得る所もありましたから、今後私は若返つて大分永く世のために盡すことが出来るといふ意識がありました。併しながら昨年四月の卒業式を終つて一年の計畫を立つるに當り、又いろいろ私が自ら事に當らねばならぬ事が多く、且臨時教育會議に於きまして、大學制度並びに教育法改善案、師範教育改善案、女子教育改善案が審議さるゝことになりました。これは私が十七歳の時師範學校を出た場合に、どうしても志を立て、吾が帝國の教育を根本的に改善せねばならぬと決心し、其の動機から女子教育に身を委ねたのであります。恰もこの會議は千載一遇の時でありますから、假令この身を犠牲に供しても、私の最上を盡し、御國の爲に努力を捧ぐべき唯一の機會であると確信致したのであります。否私はどうしてもこれを、この義務を止めて自分の養生にかゝるといふことは出来ませんでありました。——これが平常ならば兎に角、昨年九月には他に致し方がなかつたのであります。——然るに九月になりまして大分疲労いたしました。或日肝臟部が急に痛み出したことがあります。私は手先をもつて觸つて見ますと、肋骨の下にかたまりの出来て居るのを感じました。私にはそれが肝臟であるか、或は大腸であるか分らなかつたが、其の

後も大分久しくそのかたまりがとれなかつたから、或は悪性のものではないか、若し悪性のものならばたとへ醫者に見せても

如何ともすべからざることであるし、又さうでなければ自分で出来るだけの養生をしつゝ仕事を續けて行かう、といふのは今若しこれを醫者に診て貰つて悪性のものであるといふことに決められると必ずや私の仕事を續けるといふことを止められるに違ひない。さうしては折角決心してかゝつたことも無にしなればならないし、又折角これから用意して進軍しようとする時に、士氣を阻喪させる怖れがある。と思うて私は殊更醫者には見せなかつた。そして私は私の書齋にある醫書を調べて研究して、養生をして居つたのであります。それから十一月の末と思ひますが、或日高木男爵の處へ用事があつて参りました時、私は博士にそれとなく少し謎をかけて見ました、所がそれでは腹を診てやらうといふことであります。私も考へた末、それでは若しこれが悪性のものであつた場合には、日頃傾懇意にして居る博士のことであるから、どうか博士のお心にだけお含みおき戴いて決して他に洩らさぬやうにして、さうして養生法を御相談して戴かうと思つて、さうしてたうとう診察を願ひました。がその時は、先年私が肋膜炎を病つたことがあります、其所がカタマツてそれが肝臓部を押し出して居るのであるから、

肝臓よりも寧ろその胸の方が心配なものであるかもしれぬといふことであります。

それから今年になりまして、こゝで諸子に會うたのが八日であります。その翌日九日に又私は博士の處へ行つて、どうも急にカタマリが大きくなつたやうでありますから、もう一度診て戴きたいと申しました。さうして尿の検査をして貰つた所がその色は血が混つて居るかと思ふやうに赤く、——或は膽汁が混つて居つたのかも知れませんが——又量も五十瓦もない位であつたので、博士も驚いて居られました。さうして「ともかくもこれは病院ものだ病院へ入れ」と言はれて、それから又東京病院長の——博士の御次男の——高木兼二博士にも診て貰ひました。その時私は博士の診察の前に、私はあなたに診て戴きますが、要するに療り難いものであらうと思ひますが、私は若い時から疊の上では死なぬ覺悟でありますから、死といふことに對しては極平氣であります。死は私にとつて日常生活の一部であるから一向氣にかゝる事ではないのでありますから、どうか御診察の結果をありのまゝに言つて下さい。それから又私にはまだ片づけなければならぬあとの仕事がありますから、私の命數が今後凡そどれ位あるかも言つて戴きたいと申しました處、併しそれは醫者といへどもさう正確なことは解らないと言はれま

した。

それから十三日の教育會議に出席して夕方歸つて來たら、松浦君が亡くなつたといふことを聞いて直ぐ又出かけたのでありますが、實はその頃もう大分力が抜けて居つた、けれど、おしり起きて居つたのであります。それから十五日に松浦君の葬式があつて、それにも私は臨席しましたが大分つとめて居つたのであります。その晩であつたか、こゝに居る仁科さんが來て「どうも先生のお顔色がお悪いやうでありますがどこかおわるいのではありませんか、お医者には診てお貰ひになりましたか」といつたので、「ナニそんな事を心配せぬでもよい」といつて氣の毒であつたけれど少し叱りました。けれども仁科さんは又「それでもけふも皆んなが先生のお顔色が大變黄色にお見えになるといつて心配して居りました」といふ。が私は——その晩はたうとうその儘にしてしまひましたが——「これはもういよ／＼明かさなければならぬ時機が來た」と思つてそれから麻生君と塘君を呼んで初めて眞實のことをお話ししたやうなわけでありました。それから大分騒ぐことになりまして、お医者さんも高木博士、二木博士、平井博士がいろいろ診察もし又血液の検査もなされた結果、その診断を私に告げるのに死の宣告でもするやうに思はれて心配する人もありましたが、私はどうぞ少

しも氣遣ひなく、眞實のことを告げて貰ひたいというてすつかり私に話して貰つたのであります。私の病氣は肝臓の中に腫物が出來たといふことであります。さうしてこの腫物に二種ある、その一つの方は治療が出来るが他の一つの方は今日の醫術では如何ともすることが出来ないものといふことであります。私のはこれが癌だか肉腫だか醫學上まだ確定が出来ないが、併しこれは治療の出来ないものであることは確かであることは三博士とも一致して診断さるゝ所でありました。

その前に、私は醫師の宣告を待つ迄もなく、自分もさう思つて居たのでありますから、今その診断を聞いても少しも驚きも怖れもしなかつたのであります。が其の時はまた外にも病があつたので實は危い時であつたさうで、二木博士は決して寢床から離れてはならない。若し腦貧血でも起すことがあつてはならないと心配されました。それで私はその場合大切な後事のことにいつて言ひ置くべきことを忘れてはならない、と思ひまして、先づ自分の意識鮮明な間に私の後事を私の日頃から信頼する大隈侯、澁澤男、森村男、久保田男だけには是非お目にかゝつて直接御依頼して置きたいといふ希望を持つて居ることを塘君を以て依頼した處が、どなたも早速御承諾下さつて、澁澤男はずぐお見舞を下さり、又三日目には男爵自ら私の病床にお出

で下さつて後事について私の言ふ所を委細御了解下さつて、「如何にも成瀬さんのいふ事は尤もである。又さういふ意見は私も同感であるから萬事承知した」と仰つしやつて、それからその内容についてアノお忙がしいお方が屹度毎日私の病床をお訪ね下さつて御相談下さいました。久保田男爵も亦同じ日にお出で下さつて「見舞とはいうたが實は私はお前の覺悟を見に來たが、今その覺悟を聞いて安心した、若しその覺悟がないやうであれば私からいひ出して促がさうと思つた處であつた」といふ調子で、一々私の意見に御賛成下さつたのであります。大隈侯爵はその時は少しお風邪氣であつたので少しよくなつたら必ず見舞ふといふ仰せで、きのふ二度目の評議員會の後に侯爵は濫澤男爵などが——御承知の通りおみあしもわるい上に殊に、私の宅の梯子段は急で平常壯健な者でも危いやうな所であるから——といつてお止めになるにも關らず、「ナニ大丈夫昇れる」と仰つしやつて、まことにむさくるしい病床までおいで下さいました。さうして私の後事につきまして異常の御同情を下さつて、案じる事はない、といつて力をつけて下さいました。且「お前は今死んではいけないから私が靈藥を持つて來たからこれを飲め」、又温室に出來た苺や、トマト、メロンなどを下さつた。實は私の病氣は食物をとるとすぐ吐き氣を催してなか

く／＼交付け難いのですが、アレは非常においしうございました（「記者註」とふり向いて大隈侯に謝意を表された。けふ非常に元氣なのはさういふものをいたゞいて食が進んだわけであらうかと思ひます。森村男爵はけふ此所にはお見えになりませんが、前に、私が塘君を以て今度のことを申し上げると——男爵は御病氣で熱海に御靜養中であられました——早速承諾下さつて、さうしてアノ交通の不便な熱海から、殊に御老體の上に少しお風邪氣の所を、わざ／＼御歸京になつて私の病床を訪ね、熱烈な同情と希望をお與へ下さつて、又評議員會に御列席下さつて重要な問題に就いてよく御了解下さつて、萬事私をして後顧の憂ひがないやうにお引受け下さいました。

——私が重い病氣に在りながらなげけふ迄諸子に黙つて居つたかといふことは以上に申しましたやうな後事を依頼する用意を急いで居りました爲と、又これを早く發表して徒らに皆さんに心配をかけても致し方のないことといふ外に何にもないのであります。が併し私は前申しましたやうに九月頃からこの病症を自分には見出して居りましたから、夏以來の講義の中には前に私がチブス後若返つて尙永く働くといふことを申したので消す意味をいふたことがあります。又私は其の頃から度々その意味のことを諸子に暗示したことがありますから、考へてごら

んになつたら今日思ひお當りになることがあらうと思ひます。

尙又私の心理状態を一言申して置きたいのでありますが、實は私には病人であるといふ意識はないのであります。併し苦しいことも痛いこともあるにはありますが、それは常の時でもあることで、今死に面して居る病人であるといふ意識は毛頭ない、日頃と同じ心持であります。又死ぬるといふ意識もございません。それであるからこの御心配下さいました三博士が揃うて「あなたは不治の病氣に罹つた」といはれることを死の宣告であるとは思はないのであります。否寧ろ生の福音であります。何んにも私には死に就いて怖れる所は實際ないのであります。實際私にとりまして死は極自然の日常生活であります。故に死は私にとつては怖れでもありません、悲しみでもありません。残念でもありません。之が重病の私が尙比較的元氣で居られるわけでありませう。又諸子に私が昨年中少しも苦しきうな病狀を見せない、又諸子が少しもお氣がつかかなかつたといふことも、それは私自身にさへ病人といふ自覺がなく、苦しいといふ感じがなかつたからであります。ましてこれは致命症にかゝつたといふやうな意識は私の心の中には全くないのでございます。要するに私にとつては生の問題と死の問題とは全く同一でありますから、今日の場合にも何の不安も何の疑惑も何の暗黒

面もありません。それで實は我々は斯うして居る瞬間々々死んでゐるが、又同時に生きて居るのであります。即ち生があるから死があり、死があるから生があるのであります。これはよく研究を遂げたならば實に相離れることの出来ない關係であることが解ります。實に生死の音律は毎日の生活の音律となつて流れて居るのであります。此の肉體の死はたゞこの波動の中の少し大きい波であるといふだけで何の違ひもないのであります。

成程私は致命症の病氣に罹つて居るに違ひない、私の肝臓は今ずつとこの臍の處まで板のやうに固くなり、所々岩石のやうに嵩ばつて壓迫を感じるのであります。又時々痛みもするのであります。けれどもこれは私がこゝに胸に着けてるカフスや眼にかけてゐる眼鏡と同じやうなものであります。これは私の本當の身體ではない、直ちに脱ぎ捨て、終ふ衣服である。私の本當の身體といふのはこの中にある靈體である。而して此の靈體は私の品格であります。即ち私の肉體は茲に朽ちるが私が六十年かゝつて畢生の努力を以て築き上げた私の靈體即ち私の品格は、靈の宮は永久に亡びないのであります。我々の生命には死滅といふことはない、消滅といふことはない、私は確信します。故に何の怖れることがありませうか、又何の悲しむことがありませうか。

私は今日の會は今から八年前——大正元年——に私が歐米を漫遊するについて皆さんと送別會を開いて、さうして留守中のことを皆さんにお願ひいたしました、今の私の心持は其の時の心持と同じことで、この會はその送別會である心持で後事を先輩の方々に願ひし、又諸子には能く留守をして貰ひたい、能く此の理想目的を達成して貰ひたいといふことを願ひして置きたいといふのがこの會の私の心持、又この満堂の氣分であります。さうして今先輩たる教務委員、大隈侯爵、久保田男爵、財務委員澁澤男爵、森村男爵に私の考をよく御了解いただき、又快く御承諾いただいたことは私は實に難有感謝に堪へないのであります。それで今度は諸子に云つて置きたい箇條をこれから御話し致します。此の箇條書は最初私が澁澤男爵にお目に掛つて後事を御依頼したものと同一のものであります。さうして又これは評議員方皆さんの全部御承認に成つたものであります。故に私は實に歡喜措く所を知りませんのであります。今これを朗讀いたしますから、諸子も共同一致此の折角築き立てた事業を發展改善するの責任を分擔して、皆さんが相協同して此の事業を成就して貰ひたいのであります。

——朗 讀——

今回不治の病氣に罹り候事各位に御心配相掛け候へ共、自分

に於ては四十年來の宿志に殉ぜし確信を以て秋毫の怨みも無之、一身上に就いては有限の肉體を離れて無限の生命に入るの日も遠からざるべしと覺悟罷り在り候て心中何等の不安を覺えず候。本校の事業に就いても十又九年間評議員各位の多大なる御盡力によつて今日の規模を見るに至りたる事衷心感謝に堪へざる所に有之候。然し未だ當初計畫の半ばにも達せずして之を後繼者に引繼ぐは甚だ遺憾に思ふ處なれども、現在の基礎の上に漸次發展の道を策することは評議員各位及び後繼者諸氏の努力を惜まれざるべきを信ずるが故に、左に將來の計畫に就いて自分の懷抱せる希望の要點を擧げて御審議を乞はんとす。

學校組織の事

一、設立當初の目的に基き専門學の現制を改め、綜合大學の組織に進むるの時機に到達せるを信ずるを以て、此の際十年計畫を以て之が實行を策すること。

一、先づ第一に本校内の閱歴と設備に考へ、又社會の情勢と要求に鑑み、家政大學を設立するを適當の順序と認め、漸次文科、醫科に及ぼさんことを期す。

一、之が準備として適當の資金を募ることを急務とす。之は

從來多大なる御助力を賜はりし評議員各位の御援助に待たざるべからず。

教育の精神的基礎に關する事

一、校内に於ける精神教育の基礎は從來自分の主力を傾倒して培養したる生命なれば、後繼者に於て一層鞏固に確立するやう努力せられんことを切望す。

右二項に就いては幸に評議員各位の是認賛同を得て、此の際其の計畫方針を決定せられんことを切望す。

次に私の後繼者に關する件。此の後繼者に關して問題が起ること、思ひます。それは後繼者を内に求むるか、將た又外に求むるかといふ問題であります。私は今日、母校の此の一大家族のメンバースを皆こゝにお出でを請うて、これを外に求めませうか、或は内に求めませうかというて投票を行うて諸君の意見を求めたならば、如何なる結果になりませうか、私は申す迄もなくこれは内より求めんければならぬといふことにならうと思ひます。如何となれば、これを外に求めたならば本校の今生命として居る教育の精神的基礎を永久無限に繼承して行くことが出来ません。

第二の問題は、今後この母校の繼承者は又この無限に進展す

るこの意志は、婦人の團體が繼承すべきか、將た又男子の團體が繼承すべきかというたならば、此の問題に就いても等しく今投票を以て行つたならば、大多數を以て婦人の團體即ち櫻楓會が繼ぐべきであるとして決定するに違ひないと考へるのであります。必ずや此の女子大學、此の本校の當初からの主義精神を以てすれば、これを女子の團體即ち櫻楓會に求めんければならぬ、櫻楓會がこの責任を負うて立つといふ大決心をなさなければならぬ、又さう決心しなければならぬ、と信ずることであらうと思ひます。さういふ私の考から私の考を決めて茲に評議員方の御賛同を願つたのであります。

後繼者に關する事

一、麻生正藏氏を以て校長の後任者に擧ぐる事

麻生氏は創業時代より自分と提携して共に協力して其の計畫に従事し、殆ど同心一體たりしのみならず、開校以來學監として自分を補佐して今日に至り、本校の主義方針に就いて兩人の間何等扞格する處を見ず、校長として後事を託するに同氏を以て最も適任なりと信ず。

一、塘茂太郎氏を評議員に推薦する事

塘氏は開校以來幹事として専心一意校務に執掌し其の功勞少

からず、將來評議員として本校の最高機關の一員に列せしめたく希望す

一、從來の學監は副校長の意味を有したれば、今後は之を廢止し、而して各學部の部長を學監（又は學長）と稱しては如何、井上秀子氏を家政學部の學監に擧げ、家政大學成立の上は引續き其の學監たらしめたく、又平野濱子氏を學生指導主任（其の名義は適當に定められたし）に擧げ指導方面を掌らしめんことを希望す。

井上氏は第一回の卒業生にして卒業後直ちに、平野氏は開校以來共に在職多年生徒躰育の功績少からず、且本校教育の精神より云ふも女子をして女子教育の要衝に當らしむるは當然の事理に屬するを以て右兩氏を主要なる任務に就かしめて輔導し順次他に及ぼされんことを希望す。

一、塘、井上、平野三氏を麻生氏の下に本校の幹部員として互に協力補佐して、教育經營の兩方面に亘る樞機に與からしむること。

職員、生徒に發表の事

一、自分がかゝる不治の病體を以て到底校務を見ること能はざる場合となりたれば、將來學校の組織に關する計畫及び後繼

者の事は只之を内定に止め置かず、既に今日に於て各其の責務に當りて責任を盡されんことを望むが故に、此の際職員、生徒に對して之を發表し、其の不安動搖を防ぎ、將來の事に杞憂を抱かしめざるは機宜に適當する處置なりと信す。

斯ういふ決議にしたのは、要するに今後だん／＼と女子の位置を高めて行くといふことになるのであります。私は男子の身であるからたゞ／＼椽の下の力持ちをやつて來たに過ぎませぬ。麻生君、塘君とても同じことで、三人の後はだんだんにこの母校の娘がやつて行かなければならぬのであります。

斯う申しても私が明日から直ぐと活動を止めるといふものではありません。前に申した通り私は病床に就きましても呼吸のつゞく限り此の私の仕事に熱中して諸子と共にこの學校の精神教育の基礎を養ひ育て、行く爲に奮闘いたします。さうしてどうか諸子が共同の力を以てよくやつて下さる所を十分見届けて安心してお別れがしたいのであります。大變に時をとつて且御心配をかけまして済みませんが、これ丈けのことは私が直接に申して置かねばなりませんので御許しを願ふたわけでありませぬ。殊に慈愛深き學校の親たる評議員各位が引續いて非常な御熱心を以て此の問題をお決め下さつたのみならず、今日これを發表するまで御臨席下さつたことは私は衷心より感謝に堪へな

い次第であります。ではさやうなら、さやうなら皆さん——。
(この講演時間一時間と廿分、音聲も終始變らず否説き來つて益々熱誠溢れて眞に病を忘るゝかのやうでありました。尙以上は一言一句口述其の儘の筆記であります。)

(「家庭週報」第五百二號・告別講演) 大正八年一月

我が帝國は

今後如何なる女子大學を要するや

吾人は女子の天性稟賦の傾向と特性とを研究して、女子は本能的に人類の獲得せる諸有後天的善を保存し、一段の高所に於て新要素を同化して、社會國家を向上せしめんとする資質を有せることを論斷した。此の見地から、我が帝國の女子は、其の本分責務として、我が國家族制度の眞髓、國民性の美質、及び博愛仁慈の婦人の本領を永く保存して、之を醇美ならしめ男子の及ばざる所を補ひて、西洋文明の長所を同化し、東洋文明の復興を促がす使命を荷へるものであると信するのである。故に吾人は我が國の女子教育の方針を決定せんとするに當り、男子のそれを模倣し、或は歐米のそれを移入するの不可を唱へ、女子に最も適切なる特殊の高等教育を主張せんとするのである。

而して吾人は女子大學の中心學科として、國情に鑑み、時代を考へ、先づ家政學科、宗教科、醫學科を置いて、漸次其他に及ぼすのが適當であらうと思ふのである。

第一、家政學科(理科)

直覺的神祕的賦性を健全に發展せしめ、科學的頭腦を啓發し、熱情的勢力を善導し、家庭問題、婦人問題、社會問題の合理的研究、家族制度の眞髓の保存醇化、國家功率荒廢の匡救、家庭消費經濟の有効、家庭副業の組織的組合、兒童母親の保護、國民休養の指導によりて一般健康の増進等、社會の改善進歩に貢獻し得るところの知識技能を養成せんことを期し之れがために、家政科を中心として、理科、經濟學科、農科、商科、人類學科等を聯絡の分科として開設する。

第二、宗教科(文科)

國民性の美質、即ち國民精神生活の後天的美を保存醇化し、精神的荒野を開拓し、物質文明の弊害を矯救し、國民の信念を覺醒し、兒童の信念を涵養し、社會救濟事業を指導し、婦人團體の組織を指導するに足るべき、母親教育家指導者を養成せんがため、宗教科を設け、之れに關聯して、文科、社會學科、教

育科、美術科、音楽科の如きものを置く。此の宗教科は我が國の國情と、女子の賦性とに適當せる精神的活動の源泉となるべきものにして、男子大學の文科哲學科等に對比すべく、勿論學理の蘊奥を講究するも、其の特色としては、生活と發表とを重んじ情緒情操の涵養に基礎を置きたいのである、宗教哲學の如きも男子は之れを思想として取扱ふも女子は之れを生命として自ら生活し、家庭社會に發表する。即ち彼は知識として研究し、此は情緒情操として經驗する方面に進展する傾向を有するのである。文學美術音楽に於ても男子は之れを生活のための職業とし、或は享樂の媒とし、動もすれば趣味と品性を墮落せしむる危険に陥り易きも、女子は之れを天職とし、其の情緒情操を美化し、宗教的生活を發揮するを本旨とする。約言すれば、男子は學藝を商賣化し己れの享樂に利用せんとする弱點を有するに反し、女子は斯道のために犠牲奉仕の根本要求を充たして満足する長所を有して居る。

第二、醫科

吾人が特に女子に高等醫學を授けんとするは、慈愛と犠牲との念に富める其の稟性を發展せしめて男子醫師の短所を補ひ、家庭社會國家の健康狀態を改善上進せしめんとするに在る、古

來我國醫術の動機は仁術にして、正義人道の主義に合致し、眞に神聖なる天職の觀があつた。然るに物質的思想の餘毒は此の仁術をも汚瀆して、殆んど之れを商賣化し、其の弊墮蹙に堪へざるものがある。従つて其の研究も物質形體を重んじて、人間心理の眞髓を疎んじ、往々其の診斷を誤り、己れの名利より打算して、病人を見殺しにするも敢て厭はざるものある風を生じ、其の間、同情仁愛の精神の發露を見ず、仁術の精神は殆んど地を拂うて居る。其の弊は婦人小兒貧困の病者に對して、最も甚しきを見るのである。此の惡弊を匡救し、殊に婦人小兒の心理生理を觀察研究して男子の及ばざる隱微の境に入り得るは、女子の特長である。されば男子と共同して、身心を苦しめつゝある病者のために奉仕するは最も女子に適當にして、おのづから其の賦性の長所を發揮すると思ふのである。

其の他、一般婦人界に衛生の知識の普及を圖り、家庭、學校社會の衛生効力の増進、人種の改良、國家の兒童母親の保護、傳染病防禦の効力増進、衛生委員、視察委員の養成、女子教育の指導等は、亦女子の醫師の適任にして、之れやがて女子が國家功率の増進に貢獻する、有益なる天職である。而して女子醫學として適當なる専門は小兒科、婦人科、及び病人食物の研究等である。醫科を中心學科として、之れに關聯して開設すべき

は、體育科、藥學科、病人食物及び營養科、人種改良學科等である。今以上の三中心學科と之れに關聯せる各學科編制の私案を左に掲げて參考に供することとする。

一、家政學科（理科）

目的

- 一、高等教育の方法として日常生活に應用せる科學藝術の知識を與へ合理的科學的家庭管理の訓練
- 二、國家及社會の單位としての家庭に對する一般的解釋
- 三、家政學の教師及び家政學を基礎とせる一般社會事業の働き手としての準備を與ふることを目的とす

一、家庭科學

- 一、食品化學
- 普通食品の成分及び定性分量

二、同上

特殊食品の定性分量

但し此の科目は研究科に於て研究せしむ

三、食品生産及び其の供給

食品製造過程、贖造品鑑別、食物保存

四、氣象學 五、園藝學 六、家政學科史

七、養物調理法

食物材料に對する熱冷醱酵の影響

日本料理、西洋料理、支那料理、家庭料理

調理研究、病人食物

但し研究科生

八、食物營養論

人體に於ける食物生理的變化、

食物營養價保健食料、市價と滋養價獻立實習、實驗

九、人體食物必要論

食物新陳代謝實驗、食物必要量研究

但し研究科生

十、食物經濟

家庭及び國家より見たる食物經濟

其の他時事問題の解決

經濟的衛生食品の研究

但し研究科生

十一、衣服材料

毛、絹、木綿、麻及び織物の化學的取扱

交ぜ織物、偽せ織物の研究

十二、織物製造及び其の供給

各種織物の製造過程、其の耐久力

工場參觀

十三、衣服の衛生的品質

各種織物の保温性、通氣性、有害染色

十四、衣服洗濯、及び汚點拔

和洋洗濯法、其の實習

細菌學を應用して衣類の洗濯に及ぶ

十五、衣服の經濟

収入に適當なる配分を基礎とせる

衣服費、贅澤、流行

十六、家屋構造

土地選定、周圍境遇、設計、構造

土地借受及び建築の契約方法

十七、家屋衛生

換氣、暖房、採光、土地下水、上水

通俗的衛生狀態、科學的標準との比較研究

十八、家屋の經濟

収入の適當なる配分を基礎として家屋及び

其の設備

家具、借家と自家との比較

×十九、能率増進の家屋設計、研究

但し研究科生

二十、兒童保護

兒童と國家、育兒法、兒童教育

×二十一、兒童保護問題

保育教育の研究

保護科設置

但し研究科生

二十二、生物學的化學

下等生物より人類の營養に及ぶ

成長、自然淘汰及び種屬保存

二十三、家庭細菌學

腐敗醱酵の細菌、衣食住に對する

細菌の作用

不衛生なる家庭狀態に於ける細菌の繁殖力

二十四、家政學教授法

教育の目的、教材の選擇、他學科と家政學の關係、教授實習

初等教育に於ける

高等女學校に於ける

カレッジ教育に於ける

二、家庭藝術

一、衣服及び織物の歴史的の研究

二、衣服の形及び改良服

實用經濟及び美術的要素を有する衣服の研究

三、衣服の調製、繰廻し、廢物利用

四、衣服の裁縫

和服

衣服の裁縫

五、色の配合

色の原理、衣服色の取合せ模様等

六、刺繡、編物、手藝品

七、染色法

八、家屋の歴史

東西建築史

九、家屋の裝飾

壁、床、家具の色の配合

和洋各室の裝飾法

家具の研究

三、家庭管理

一、家庭起原及び歴史

二、家庭論

結婚、男女心理的基礎、道德的宗教的要素

三、家庭と國家社會との關係

四、家族の法律上位置

親族法相續法より論ず

五、富の消費論

六、家庭と生産者との關係

七、家庭の收入及増加の方法

八、收入の分配、豫算

九、家庭簿記法

十、買物

小賣市場、共同購買、物品の鑑別、買物實地練習

×十一、生活標準、及び適當なる標準の研究

但し研究科生

十二、家庭労働の有機的關係

十三、家族に對する注意及び奉仕

十四、衛生及び經濟、美的方面より衣食住の管理

×十五、能率増進方法、研究

但し研究科生

×十六、最近の家庭管理問題

但し研究科生

四、家庭看護科

醫學部と連絡を保ち看護學校及び社會事業に携はる人格者を養成す

一、看護歴史及び其の原理

二、家庭看護及び病人介抱其の實習

三、病人食物實習

四、公衆健康の研究、女子健康の増進

五、社會事業、指揮管理

×は研究科生即ち卒業生にして學位の候補者、及び卒業生にして特種の訓練經驗あるものゝために開く

一、理科

一、經濟學科

一、農科

一、商科

二、宗教科(文科)

學科目

第一部

一、倫理學

二、宗教概論

三、宗教心理學概論

第二部

一、教育學及教育心理學

二、宗教心理學(特に青年期の精神的動機—個人的と社會的—)

三、自然研究

第三部

一、東洋宗教史(文明史並に宗教的偉人の傳記に關聯して)

二、西洋宗教史

第四部

一、宗教哲學の諸問題

例 空海、王陽明、中江藤樹、平田篤胤、ポーロ、アウグスチン、カント、シユライエルマヘル、コント、ゼームス、ベルグソン、メーテルリンク等の宗教認識論及信念の經驗

第五部

一、宗教の社會的問題

一、宗教と道德及經濟の關係

二、宗教と社會との關係

三、宗教と教育との關係

四、宗教と科學との關係

第六部

一、宗教と藝術

一、宗教と文學

二、宗教と神話

例 女神の位置 神仙譚 婦人と平和的思想 婦人と罪惡との

關係 動植物並に生殖に關する神話等

三、宗教と音樂

四、宗教と美術

第七部

一、應用問題

一、宗教の信條、儀式、救濟の發達史及批評

二、家庭に於る信念涵養

三、幼稚園及小學校に於る信念涵養

四、高等女學校及中學校に於る信念涵養

五、高等教育と宗教信念との關係

六、社會改善事業

設備

宗教研究に對する博物館の設置

神道儒教佛教基督教等の研究の參考品地圖古物寫眞必要なる

書籍等の設備

一、文科

一、社會學科

一、教育科

一、美術科

一、音樂科

三、醫科

一、解剖學及組織學

二、生理學

三、醫化學

四、病人食物及營養學

五、病理學及病理解剖學

六、藥物學

七、處方學

八、診斷學

九、婦人科學——及外來患者臨床

十、產科學——及外來患者臨床

十一、內科學——及外來患者臨床

十二、外科學——及外來患者臨床

十三、眼科學——及外來患者臨床

十四、耳鼻咽喉科學——及外來患者臨床

十五、皮膚病學、黴毒學——及外來患者臨床

十六、精神病學——及外來患者臨床

十七、小兒科學——及外來患者臨床

十八、齒科學——及外來患者臨床

一、藥學科

一、病人食物營養學科

一、體育科

一、人種改良學科

參考資料

シカゴ大學

家政學部

緒言

家政學部に於ける諸學科は、

一、高等教育の一方法として社會に於ける家庭の位置に對して

一般的見解を與ふるため。

二、社會的單位として家庭の合理的及び科學的管理の訓練。

三、家庭經濟、家庭科學藝術の教師となるに適する準備及び家

政學の知識を基礎とする各方面に於ける社會的事業の働き手としての準備を與ふるために企圖せらるゝものなり。

此の學部の正規學科は他の學部に於ける教育者の指定せる他の學課に因つて補足せらるゝものにして殊に社會學、化學、動物學、物理學、細菌學、教育學（家政學部生徒の要求に適するやう應用せられたる）等に就ては特別の注意を拂はざるべからず、學生にして特種の働きに對し、準備せんとし、又一定の働きに自己を順應せんと欲するものゝ學科の選擇に付き教育者は其の指導に與るべし。

此等の學生に對して特別の證書は與へざるも其の學科修了の證明は要求によりて與へらるべし。

家政、食堂管理、買物、家計整理及び此に類似の働きに付き實際的經驗を得るの機會を與へらるべし、其の他教室に於ける教育の補充として慈善事業に参加するの機會屢々あるべし。

家政學部のクラブは時々必要なる問題の討論、教授學生間に擔當せる研究の結果を發表、及正規學科以外の必要問題につき其の道の人の説を聞く事あるべし。

通信教育によりて或種の學科は與へらるべし、家政學部の諸學科は左記六種の學生に與へらるべし。

1. 大學部卒業生にして更に進みたる研究を遂行せんとするも

の、マスター及び博士の候補者は此等最高等に對する大學規則に従ふべし。

2. 四年生にしてシカゴ大學及び他大學の三年生所定學科を完了せしものは家政學部バチュラー學位のために主專攻又副專攻科を撰び又自由選擇として此學科を選び得べし。

3. 大學三年生にして認可の學科表より十五ユニット (Unit) 授與を許されたるものは規定の學科と共に家政學部中の或る學科を選び得べし。

4. 教育學部の生徒にして四ヶ年の學課に登録しバチュラー學位を得んとするもの。

5. 教育學部の生徒にして家事經濟科二年の證書を得るの候補者。

學科の組立

家政に於ける學科組立は次の學課より擇び得べし。

一、普通細菌學

二、公衆衛生

三、有機化學初歩

四、家族論

五、小賣市場の有機組織

六、富の消費論

七、貧民家族の救濟

八、家庭に對する公の見解

九、法律上及經濟上に於ける婦人の位置

十、小兒と國家

十一、家庭管理の問題

十二、家庭經濟の要素

十三、家屋の衛生

十四、食物供給と飲食論

十五、家屋の管理

十六、家庭管理の最近問題

其他教育學部に於ける家庭經濟部及家庭藝術部の諸學科は教授及家政學部長の賛同を得て擇び得べし。

家政學部に於て主專攻學科を取りつゝある生徒は最初に於て次の學科を修めざるべからず。尙學監の承認を経て其二科目は主專攻科目を組織するために擇べる九科目中に組み入れ得るものとす。

無機化學、生理學初歩、經濟原理、市民政治等。

第二組立

一、生活の標準

家庭經濟の要素、家屋の管理、小賣市場の組織、富の消費

論、貧民の救済、家庭の公の見解、家庭管理問題

二、社會及政治的單位としての家庭

家庭の立場より見たる家政、家屋の衛生、家庭經濟の要素、家屋の管理、家庭の公の見解

三、家庭の立場より見たる家政

家屋の衛生、食物供給及飲食論、家庭經濟の要素、家屋の管理、家庭の公の見解

6. 學位に關係なく是等の學科を學修せんとする特修生。

かゝる生徒は少くも廿一歳以上にして高女四年を卒へ、又は

是と同程度にして物理又化學の何れかを含める學科を修めたるものならざるべからず。

特修生は其望みにより何れの學科をも擇び得べし。従前の素

養の十分なるや否やの決定は其の選擇學科の教授に委任す。

教授學科

一、小賣市場の組織

學生をして主婦たるものゝ直接交渉する賣買上の機關に親

ましめんとする學課なり。代表的の市場の參觀

二、富の消費論

生活の標準、生命及能率に對する必要、慰安、贅澤、奢侈、最少勞銀と生活的勞銀、貯蓄及消費、生産を支配すべ

きやう消費者の連絡せる運動

三、貧困家族の救済

四、家庭に對する公の見解

家庭と州、聯邦、市の權威等により代表されたる公との關係を檢查せしむ

五、婦人の法律上及經濟上の位置

財産上の婦人の位置、結婚の影響、小兒監理の分擔、賃取

及生産者としての婦人の機會

六、小兒と國家

七、家庭管理に於ける問題

此學課は教師社會事業の働き手、科學的主婦としての特別

の訓練及經驗を有する學生にのみ與へらるゝものにして之

れ深く登録前教授と談合すべし。

八、家屋衛生

健康の要素として家屋を取扱ふものにして、特殊なる注意

が最近の清潔の意味に拂はる、通俗的意味の衛生的境遇及

科學的標準より見たる衛生的境遇の研究、團體家庭（學校

の要求する特別なる例證を以て）

九、食物供給及飲食論

食品の滋養及其價、食物に對する火の影響、食物鹽造品、

保存法、食物の衛生的及經濟的見解、食物に對する通俗的誤解

十、家屋の管理

收入の適當なる配分及適當なる標準の維持等の見解を以て家屋の整理及管理其他家庭奉仕の問題を論ず

十一、家庭管理の最近問題

獨立に研究を遂げ得る生徒にのみ課せらる、確實なる科學的基礎に於て家庭管理の問題の解決を助くる最近及未解決の問題を取扱ふ

十二、種々なる特別問題の研究

特別なる訓練と經驗を有する生徒にのみ開かる

女子に高等専門教育を授くる緊要なる理由は以上の説明を以て盡きたるものにあらず、今後文明の進歩に伴うて、人生生活の狀態に革新を來たし、徒らに舊來の風習を墨守することを許さず、社會の制度家庭の組織、男女の職業等、總て自ら新面目を將來するに至るは、蓋し世界の大勢の趨く必至の現象と言はねばならぬ。而して其の徴候は今日既に洋の東西を問はず、社會の各方面に現はれつゝあるのである。我國女子の高等教育に考慮を致すもの、須らく此の新形勢に着眼して、其の方針を定

め女子の性能を發展して、新氣運に適應せしむるの策を立つるを要す。然らざれば、遂に世界の大勢に後れて落伍者たるの非運に遭遇するの日あるを憂ふるのである。終りにギルマン夫人の説の一端を紹介して、女子將來の生活に關する研究の参考に供する。

ギルマン夫人の所見一端

抑今日の煩雜なる家庭事務には種々なる職業を含んである、元來善良なる料理人必ずしも理想の管理者ではない、善良なる賢き購買者たらざる事がある。是等の仕事が分業となりて自由に發達し、婦人は其の一を選びて其の業を修練することとなれば、彼等は常に家庭を離れずして、而もその専門の業には有力なる貢獻たる事が出来るであらう。……さうして若し婦人が生産者として立つときには、自然母親たる事に適する如き者を選ぶであらう。社會には、家事よりは寧ろ母たる務めと一層能く調和し得る職業が澤山ある。抑母たる事は、稀に起る偶然の事にあらずして、婦人共通の義務、婦人共通の光榮とも云ふべきものである。若し婦人にして母たることに適せざる職業を選ばなければ、自然はその不變の働きによりて、徐々に其の職業を

減じ去るであらう。

争闘を事とする未開の夫、家事のみを事とする未開の妻、兩親とは唯肉體の關係を有するのみなる未開の小兒——斯かる人々のためには、食事を共にする事は互の結合を固むる唯一の方法であつて、又簡單にして無害なる一種の温情機關として彼等には最上の方法である。けれども近代の如くに、人間の個性が非常に發達した社會に於ては、家族生活の幸福和樂の思出は、必ずしも食卓と關聯したものではない。却つて悲喜何れにもせよ、甚深の情を胸に藏する時は一日に三度平靜無頓着なる全家族と食を共にする事は、一種堪へ難き壓迫を感じることもある。若し茲に善良なる食堂があつて、廣く各方面の需要に應じ得らるゝものあらば、一家打ち集ひてそこに行き、時には宴を張り、時には簡單に濟ますことが出来る。それには唯食物供給の道を着實に講究し至極簡便に辨ぜらるゝことと、一方人の要求も、強制的に食事を以て家族結合の手段とせざることを欲するに至つたならば、斯かる方法は自然に實行せらるゝやうになるであらう……。

現今の一般人の野鄙なる生活、分別盛りなるべき壯年者の放蕩無頓、肥滿、纖弱、食事より起る一切の病氣——加ふるに性の麻痺——斯かる病的現象の基を廣く探れば、畢竟飲食に對

する見解を誤り、飲食をば家族の機能となしたるに起因して居る。故に飲食の事をして斯くまで不自然の狀態に陥らしめたる、兩性の經濟關係を絶たしめなば、之より吾等の内にある自然力は、漸く純粹に、それぞれ専ら固有の作用を營むやうになるであらう。

新育兒法とは何ぞ——勿論母の心、母の手腕といふことは、如何なる場合にも其の任を果すであらう。其の柔和其の親切は、何を以ても之に代ふるものはないのである。併し又他に他人の手も借らなければならぬ。……幼兒が同年の友達を有したるときの歡喜は非常なものである。……多勢の群に入て十分に交情を温むれば、兒童は知らず識らず我々は人類なり、吾等は同等の生物、同等に斯く養はれ、斯く監督されて居ると悟るに至るものである。……騒ぐにも遊ぶにも、自由といふことを學ぶであらう。斯くて一定の長時間内は、平穩に平等に公共の心を養はれるのであるから、かの一人の家庭にて育てらるゝ、所謂一人子の熱狂、若くは多數の年齢能力相異れる兄弟姉妹の充滿せる小兒部屋に演ぜらるゝ專横、強奪、屈從、排斥等に煩はさるゝことなくなるであらう。又母としての方面から考へると、單に我が子といふ見解ばかりでなく、我が子の傍には多數の他の幼兒を見慣るゝにつれて、自然幼兒の普通性に就

きて幾分か學ぶ處もあるのであらう。又人生の此の時期に就きて、理解することも少くないであらう。又他方には、所謂子を思ふ闇に迷ふなどといふこともなく、公平に各兒童の特性を認めて、以て母の重大なる任務に就いても、新觀念を得るに至るであらう。……婦人が協力して幼児保育のために有機的團結をなし、育児の各方面の仕事を担当して、博き愛を以て賢き良法を講じて、その育児の任を全うするといふことより勝れて、人類幸福の道を進むるものは、何物も他にないのである。

〔「家庭週報」第五百〇五―六號〕大正八年二月―三月

所感

花蹊女史、齡を重ねる正に七十年、七十の高齡を以て、現に女子教育に盡瘁する者、實に寥寥。跡見女學校年を閲する正に三十五、三十五の閱歷を有する女學校亦極めて寥寥。

單に此の二個の事實を思ふも既に賀すべきありと雖も、此の學校や終始一種の旗幟を醸して社會に臨み、幾多淑良の閨秀を輩出して頗る他の私立女學校と數を異にする所あり。

而も此の三十五年間は時代思潮變遷推移頗る急激なる時代にして、我が女子教育界の榮枯亦一にして足らず。或は上下を擧

げて殆ど歐化熱に浮かされし事あり、或は國粹の風の津々浦々に吹きすさみし事あり、毫も官府の力を藉らざる學校にして能く此の浮沈を凌ぎ、今日の隆盛を來せることを思へば、獨力之が經營の任に當られたる花蹊女史の功勞推服に堪へざるなり。女史今や古稀の齡に達せらるゝも心身共に矍鑠たり。此の學校の前途實に洋々たりと云ふべし。

顧みれば、予も亦女子教育に従事せしより已に三十有餘年の年所を経たり。今此の祝會に臨み轉た今昔の感に堪へざるなり、一言所感を述べて祝詞に代ふ。

「花の下みち」大正八年五月